

第17回  日能研

文学コンクール



最優秀賞

【創作文】セピア色の世界で

学習院女子中等科・二年

野村 仁愛さん

作品に対する思い・感想

日常の中にぽつんと佇む非日常が好きです。前を向いていく人々の姿が好きです。私はそんな彼らのことを本当の意味では理解できないのだろうけども、このような形で私の紡いだ物語を評価していただいたことを光栄に思います。

最後に、サポートしてくださった先生方、家族、そして審査員の皆様方には心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

セピア色の世界で

広瀬川の水流に日の光がキラキラと反射する。首元をジリジリ焦がす太陽に向かって、ゆっくりと振り返った。痛いほどに、すこんと抜けた青空だ。昔から、青空は好きだった。夜空も曇天も。ただ一つ、夕焼けだけが好きになれなかった。見慣れたはずの通学路でさえ青空の下ではこうも綺麗に見えるのかと、そっとため息を吐く。あたりの景色をゆっくりと見まわして、言った。

「ここから、始めよう」

あえて声に出したのはきつと強がりだ。その高揚を落ち着かせるように、鞆をギュッと握りしめた。太陽の光を背いっぱい受けながら、歩き始める。

思えば、俺の世界はいつも、色褪せたモノクロ写真のようなセピア色だった。

川べりの道を下って、それから少し歩いたところにある陸前落合駅には、比較的楽にいった。まあ、いつも自転車で近くを通っているのだから、楽についてもらわなければ困るのだが。逆に仙台駅のような大規模な駅は苦手だ。目が痛いほどの沢山の色に溢れているから。

このまま、県外にでも出てしまおうか。そんなことを考えながら電車で揺られる。過ぎていく景色の中で、俺はこの小さな旅のきっかけになった出来事に思いを馳せた。

「第四十三回仙台市絵画コンクール 入選作品集」

教室にて配られたパンフレットと呼ぶには薄いその本を、パラパラとめくる。目次にも、なかった。目を皿のようにして見てみても見つからない自分の作品に、ああ、やはりな、という思いが胸をよぎる。

「へー、今回柏木くん載ってないんだ」

「え、マジ？ 珍しー」

ミーハーな女子たちが騒ぐ声がやけに遠く聞こえる。事前に入賞の知らせが来なかったことから、薄々勘付いてはいたんだ。いや、そもそもお題が「夕焼け」だった時点で、嫌な予感はしていた。

落ちた。俺は落ちた。春の終わりが訪れた。

高三の俺は、これが駄目だったらすぐに受験勉強を始めなければならない。それが親との約束だった。もう後がないのだ。きつと美大への推薦の話も随分遠のく。美術部は。そ

うだ、美術部はどうなるのだろうか。退部、しなければならぬか。部長なのに？ ずっと絵だけに明け暮れていた。とりわけ成績が悪いわけではない俺でも、受験勉強には大きく後れを取っている。なんとたってこれから始めなければならぬのだ。それにしても、こんなに早く引退しなければならぬとは思わなかった。そんな思いを抱いて、窓の外を眺める。ぐわんぐわんと蝉の声が頭の中を反響した。きつと、最後まで部室に残って、俺だけは絵を描き続けているのだろうか、どうして勘違いしてしまったのだろうか。

十で神童、十五で才子、二十過ぎればただの人、なんてよく言ったものだ。入部当初は天才だと持て囃され、繊細な色遣いがどうのこうのと賞を総なめにしたこともあった。遠い昔のことだ。その頃の俺は、こんな平凡な形で部活を終えることになるなんて、夢にも思わなかったんだろうな。自分が天才だなんて、そうだけは思わないようになってきたはずだった。俺はきつと、ただの人にもなり得ないだろうから。

呆然と、のろのろと家までの道を進む。いつもは颯爽と漕いでいく自転車を、手で押しながら、のろのろと。終業式後すぐ帰ったのもあって、正午の日差しが首元をジリジリと焦がす。もう夏休みだからだろうか。本当に暑い。暑すぎて、嫌になる。俺は今最高に気分が悪いんだ。ねめつける様にして後ろを振り返ると、視界いっぱい広がった青空。こんなに綺麗なのに、アスファルトばかり見つめていて全く気付かなかった。そんな自分が情けなくて、うじうじ悩んでいたことも、それを上回る速度で眩しい空が脳を侵食していくから、なんだかどうでもよくなってしまった。息が抜けるように笑った時に、ふと考えた。受験だとか、勉強だとか。未知の世界に足を踏み入れるためにも、未練を断ち切るように、過去の清算をしよう。

「ここから——」

声に出したのは強がりだ。

転がるようにして家へ駆けこむ。鞆から無造作に財布を取り出し、貯めていたお年玉諸々その中へ突っ込む。今更ながら役に立ったとほくそ笑んだ。それから、擦り切れそうなりユックいっばいに詰め込んだ画材を、慣れた手つきで抱える。生活必需品などは現地で買えばいいだろう。荷物は、最低限でいい。妹が驚いたように目を見開いてこちらを見ていたから、安心していいという思いを込めて微笑んでおく。

なんとなく、義務のように思えて画集を机の上に出しておいた。玄関のノブに手をかけると、途端に罪悪感ともつかない感情が湧いてきて、すたすたと机まで戻る。相変わらず、妹がこちらをじっと見ている。今度はそれを無視してペンを取った。画集にしては余白の

多い表紙に無造作に書いておく。これでいい。いたずらをした後の子供のような無邪気な気持ちで、今度こそノブをひねった。

「行ってきます」

絵が落選したからって、なんだというのだ。いつだってそうなるかもしれないことに、気づけないほど己惚れていたわけではない。それがたまたま最悪なタイミングだっただけで。結局は、ふてくされた子供の馬鹿みたいな家出だったのだ。

黄色や青に、茶色。相変わらず、仙台駅のぎやかな路線図は嫌いだ。そんなことはどれだけ考えても無駄なので、さっさと券売機に向き合う。そうだ、県外に向かうんだっただけか。画材位にしか、小遣いもお年玉も使わなかったから、どうせ金だけはあるんだ。何処に行くかも決まっていけど、ネカフェなんか泊まれば一週間以上は優に泊まれるだろう。チャージしようと定期券に伸ばした手を引っ込めて、どうせなら、と一番高い切符を買った。

田舎と都会、どっちつかずの狭い社会に生まれて、高校生にもなって、めったに電車も使わない生活。旅行したところで別に楽しくなんてないって、家族で立てた計画もはねのけてきた。これからは碌に旅になって出られないだろうから、これが真正銘高校生活最後の旅になるのだろう。そう考えると不思議と心が弾んで、どんな景色でも美しく思えるような気がした。

「探さないでください。心配しないで」

画集に書かれたその文字に、母の肩が大きく揺れる。ケーキの箱がごとんと床に落ちるのを見て、ああ、相当動揺しているんだろうな、と思った。だってそうだ。家出少年のもはやテンプレみたいな文字を、まさか我が家で見えるようになるなんて夢にも思わなかった。画集を震える手でめくる母をじっと見つめる。いくら探しても見つからない我が子の作品に、母の顔がさあっと青くなるのが分かった。それを見て、言った。

「大丈夫だよ」

「彩音？」

「お兄ちゃんは、絵を描きにも行ったんだよ、きっと」

その言葉に母の目が緩く見開かれる。

「すっごい楽しそうだったし、だから、きっと大丈夫」

「だけど、」

「自分なりに決着つけて。いつもみたいに怒られない程度のほどほどで、飽きたら帰ってくるでしょ」

母が少し考えこむ素振りをする。その間にまた部屋に引っ込んで、用意してあったボストンバックを手に取った。ふと思いついたように、色とりどりのドットが印字されている箱を掴む。そして、一気に玄関まで駆け出す。

「お母さん！ お兄ちゃんに忘れ物届けに行ってくる」

「え？ あっ、ちょ」

母が何か口をはさむ前にドアを開けて、外に出る。この忌々しい日差しも久しぶりと思えば、いっそすがすがしく思えた。

「東北一周とかしてみたいなんて言ってたな。マジでやってたらしばく」

お兄ちゃんならどこへ行くだろう。そんなことを考えた時、ふっと一陣の風が駆け抜けた。振り返ると、視界の先に見えたのは、夕焼けの空。真っ赤に眩く光っている。あれ、数分前には空もまだ青かったはずなのに。出発前に見た時計が大体六時半過ぎを指していたから兄の出発からずいぶん時間が経ってしまった。普段よりは早いはずだと、一応母の帰りを待っていたらかなりの時間を食ってしまったなど、そんなことを考えながらゆっくりと歩みを進める。

お兄ちゃんなら、お兄ちゃんなら。

「きつと、夕日の綺麗なところ」

夕日が苦手なのは知っている。今回だってそのお題で落ちた。だからこそそこへ行つて、きつと必死に夕焼けを描いてるんだろう。人一倍負けず嫌いな、そんな人だ。

さあ、日が沈み切る前に駅まで行ってしまおう。とりあえず、仙台駅へ向かう。見かけに合わず短絡的だから、まずはそこに行っただろうな。そんなことを思つて、日の沈む坂を駆けだした。

◆一日目 宮城県 鳴子温泉

午後三時過ぎの暑い日差しがだんだんと和らいでいくのを、車窓からゆるりと眺める。

JR 東北本線から陸羽東線に乗り換えてぎつと二時間。降りる頃には六時近いのだから、日が傾いてくるのは当たり前だろう。目的地は、鳴子峡。言わずと知れたもみじの名所、しかし秋の紅葉の季節でなくともその景色には定評がある。かといって六時過ぎのもう暗くなる時間帯に山に入っても仕方がないので、今日は鳴子温泉付近に留まることにする。

「つつても、宿探しが面倒なんだよな」

そう言っつて、ひやりと冷えた窓に頭をこつんとぶつける。鳴子のあたりだと有名な温泉地ではあるから、宿泊地には事欠かないだろうが、なにぶん料金が高いのだ。電車代でももう千円以上使ってしまった。宿泊サイトの画面から顔を上げると、架線や電柱に邪魔されることのない長閑な田園風景が広がっている。新緑、というのか。聞いていたよりは黄みがかつた稲も青空とマッチしていて、とても綺麗だ。何処に泊まるかなどあとで考えればいい。今はこの、贅沢な景色を堪能しようとスマホを持っていた手をだらりと下した。

鳴子温泉駅への到着を知らせるアナウンスが流れたのに気づいて、急いで電車から飛び降りる。電車の心地よいリズムに揺られて少し寝てしまったらしい。どんなに大きな音を立てても全く起きないくせして、目的地や自分の名前を呼ばれると飛び起きる現象がある、なんてことをどこかで聞いたような気がしなくもないが、あれはなんでだったっけ。そんなことを考えるうちに、ジョイント音を一つ残して、あつという間に電車は次の駅へと出発した。

二階建てのこじんまりした、けれど清潔感のある駅の改札を出る。駅の周辺地図とのにらめっこは早々に切り上げて、地図や名所の載っている観光客向けのリーフレットを拝借する。辺りに広がる緑は深々としすぎて夜闇に紛れると、もはや黒に塗りつぶされているようだ。駅のわずかな明かりを頼りにして、今度はスマホの地図アプリとリーフレットを見比べる。この暗闇ではスマホの光も眩しいが、「観光マップ」などと色とりどりのポップな字体で書かれたリーフレットも十分に眩しい。数十秒と見つめているうちに目がチカチカとしてきた。

「あーっ、クッソ」

いささか無鉄砲すぎただろうか。今更ながら無計画でここまで来てしまったことを後悔している。だって一泊二万以上とか知らない、マジでないから。あー、と大きく呻いて、マップとスマホをポケットに乱雑に突っ込む。なんだかここにも埒が明かない気がしてきたのだ。とりあえず駅を出てすぐの駅前通りをまっすぐに進む。すると、今までの暗闇が嘘のように、旅館や店のイルミネーションが光る。祭りなんてやっているわけでもなさそうなのになんて苦笑しながら、ずんずんと、逃げるように中心部を離れた。赤や黄色、青に輝くきらびやかな町はどうにも肌に合わない。

しばらく歩いてみると旅館や店の間に民家が点在するようになり、駅前通りからこけし通りと進むにつれてその割合も増えていく。こんな観光地でも、顔を上げればすぐに森が

見えるところとかは、仙台と大して変わらないんだなんて、そんなことを考える。少し経つともう民家が見えなくなり、少し、いやかなり焦ったが、また少し歩けば街並みが顔をのぞかせたので、ほっと一息ついた。

そこに、町の隅っこに肩身が狭そうに置かれた喫煙所に向かって、いかにも今からタバコを吸いますというような雰囲気醸し出しながら、人相の悪い男が歩いてきた。経験上、こういう男に限って、捨てられた子犬とか、道に迷った観光客とかを見捨てられない、よくな気がする。一縷の望みをかけながら、いかにも困ってそうな観光客感を演出して、男に声をかけに行く。

「あの、すみません」

「……あ？」

……怖そうだ。この人マジで子犬拾うか？

「こちら辺に、安めの宿みたいなのってありますか」

「安めの？」

「はい、出来れば格安で」

男は少し考えこんで、言った。

「あんた、訳アリか？」

「はあ。……まあ、困ってはいますね」

「有名温泉地に何を求めてるかは知らねえが、こちらの旅館は軒並み高いだろうよ」

「ですよー」

男の答えにがっくりとうなだれる。しかしすぐ、だが、と続けられた男の言葉に身を乗り出す。

「俺んちは、民泊、にしてはでかいな。まあ、だが旅館とまではいかんものの古民家食堂もどきをやってる。きっちり金はとらせてもらうが、そこらの旅館よりはよっぽど安いはずだ。困ってんなら、ウチ来るか？」

「っはい、ありがとうございます」

息を弾ませて答えると、心なしか人相の悪いその顔を緩ませて男は笑ったようだった。

「おかえりなさい。あら、その子誰？」

「知らん、家出でもしたんじゃないかねえのか」

男について、歩いた先にあった古びた食堂では、おそらく男の妻らしき人物が出迎えてくれた。「なるこ食堂」って暖簾に書かれていたから、きっとそうなんだと思う。外見か

らして大衆食堂。

店主であろう男の言葉に、家出って、なんて軽く笑って流しながら、内心冷や汗をかく。出た、こういうタイプの人がある、謎に勘が鋭い。

「美大生なんですけど。課題が出て、ここら辺描くの丁度いいなんて思ってきてみたら」「高かった、とか？」

絵の具の付いたバックバックを指差しながら言うと、若い女に遮られた。長い髪を高い位置で一つにまとめた、淫漉そうな女性が引き継いだ言葉は見事に的を射ていた。

「あら本当？　ちゃんと調べてから来なさいよー」

「アハハ……」

きやはきやはと楽しそうに笑う奥さんを見ると、息をするように嘘を吐くことに罪悪感を感じて、乾いた笑いをこぼす。

「どうしようかって思ってたんですけど、ほんとに助かりました」

いいの、いいのよー、何て気のよさそうに笑いながら、奥さんがカギを渡してくれる。

「荷物だけ置いたら、すぐ来なさい。まだお夕ご飯残ってるから」

そんな声にへらりと笑って、代金を払う。二万とか、もつとかかることすら覚悟していたのに、千円と少しで済んでしまったので安堵した。

心に少しの余裕ができてゆっくりと店内を見回す。なるほど、なかなかどうしてこれは古民家食堂といった風体だ。普通の民家に比べて一回りほど大きく建てられた家も、上半分にすりガラスが嵌め殺しになっている引き戸も、それを一層らしくしているのだろう。

和気あいあいと、客のみんなが思い思いに、されど仲良く過ごす、そんな落ち着いた雰囲気。この感じ、好きだな、と微笑んで、軽く会釈しながら今度こそ部屋に向かった。

次に食堂に戻ってきたときには、もう机に一人分の食事が用意されていて、たいそういい匂いがした。

部屋は食堂と違って和室になっていて、小さいものの趣がある。これまた小さい嵌め殺しの窓から覗く月は、暗闇の中で静かな光を放っていて、大変麗しかった。

鯖の塩焼き、だし巻き卵に豆腐の味噌汁、サラダとお新香数種、ご飯にも下手にふりかけなどがかかってない白米なのがまたいい。決して派手ではないがおいしい献立だ。

「いただきます」

目をつむって手を合わせる。その勢いで食べ始めようと箸に手を伸ばすと、

「君、目つぶりながら食べんだね」

先程の若い女性に声をかけられ、ビクツと肩を揺らす。

「はあ、まあ」

「ちゃんと見て食べればいいのに、美味しそうだよ」

「……味勝負で食べてるんで」

「ハハッ、何それ」

まあ個人の趣向に介入する気はないんだけど、と女性は笑う。すると女性は、武雄さん、と大きな声でおそらく店主の名前を呼んで酒を注文した。

「えっと……」

「横田明美、明美でもなんでも好きに呼んでいいよ」

「明美さん、はこんな時間に何を？」

いきなり名前呼びかあ、君、モテるでしょ、なんて笑って茶化す女性に、乾いた笑いを漏らす。辛うじて目線は明美に向けながらもモグモグと口を動かすことは忘れない。程よく脂ののったござっぱりした鯖がご飯と合って実においしい。

「ちょっと晩酌」

「へえ」

「君、名前は？」

そういえば、ここにきて一度も名を名乗っていないことに気づき、告げる。

「柏木湊です」

「へえ、いい名前だね。ところで君さ」

「結局君って呼ぶんすね」

「まあね。君さ、高校生でしょ」

何気ない口調でこぼされた声に大きくせき込む。食事をのどに詰まらせかけると、明美が心配そうに背中をさすってくれた。

「なんで、分かったんですか」

「リュックの横のポケットに、明らかに大学受験用みたいな単語帳。丸見えだったよ」

「マジか……」

「それと、美大はふつうこの時期にそんな曖昧な課題出しません」

色々評価に関わるこの時期。確かに言われてみればその通りだ。

「察してる人は察してるんじゃないかなあ、家出少年。あ、でもまき子さんとかは騙されてそう」

「騙すて……」

「幸いここは部屋数もあるし、三、四十人の子供程度だったら泊まれるから。私情だけ、ここに決まったらいいなあ。自然とか？ 学べますし？」

「あんた……いい人っすね」

「あ、バレた？」

茶化すように笑う明美を横目に眺める。と、急にガタンと音を立てて立ち上がった。

「言いたかったのそれだけ、ってかこんなに話すつもりなかったんだけど酔ってたんかな」

またくいつと酒を煽るような動作をして、さらにはウインクまですると、「じゃ」と軽く手を振って明美は部屋に戻っていった。その背中に急いで頭を下げる。

「なんか、疲れた」

◆ 二日目 岩手県 宮沢賢治童話村

柏木彩音は、小さい頃から感情の色が見えた。柏木彩音は、青が嫌いだった。

トレードオフの概念というものがある。運命の岐路に立たされた時、何かを選び取るためには得てして何かを捨てなければならない。例えば、スーパーヒーローが力を手にするために、寿命を失う。努力をするにも時間が必要だ。だが、それは何も一個人に限られたものではない。

一卵性双生児が、例えば、生物学的、呪術学的に同じ扱いをされることがあるように、彼らには何とはなしに不思議なつながりがある。彩音と湊のような兄妹間でも同じようなことは起こり得る。根拠はない、証拠もない。非科学的で、おとぎ話のような話だ。だけど、必要なものはいつも、必要にしている人のもとへ与えられない。

人よりもよく色が見える。それどころか、本来なら見えないはずの感情の色まで、見えた。見えてしまった。絵の具がにじみ出るみたいに、悲しかったら寒色、嬉しかったら暖色。その人を起点に広がっていく。それでも、私に才能はなくて。才能があったのはお兄ちゃんだった。そんなにも、色がよく見えるなら、この能力がお兄ちゃんにあったらよかったのになら、ずっとそう思ってる。

思えば、私の世界はいつも、目が痛くなるほど鮮やかに輝いていたんだ。

昨晚、仙台市の駅員さんに話を聞いてみたら、兄らしき人を見かけた、らしい。切符売り場でやけに楽しそうにしていたそう。いや何やってんだろあの人。ひとまず、お兄ちゃんが仙台まで買ったことは判明した。だが、その先が全くわからん。とりあえず、一番高

い切符に手を伸ばす。さあ、何処にでも行けるぞ、どっからでも来い。そんな思いを込めて。

兄が行った場所は分からない。多分夕焼けが綺麗に見える場所。駅員さんは青森方向に行ったとか言ってた。……いや、何処だよマジで。午前中は聞き込みに戻ったのだが、さっぱり分からないので、私は——自分の趣味に突っ走ることにした。

岩手県花巻市宮沢賢治童話村

入口には銀河ステーションを模した装飾が施されている。そこを通った先に広々と緑の芝生が広がる。そのまま真っ直ぐ進むと賢治の学校、右に逸れば妖精の小径がある。恐らく妖精の小径に緑とか、自然とかが嫌いなお兄ちゃんはいないだろうと踏んでいたが、念のためそこを經由して賢治の学校へと向かうことにした。妖精の小径は宝石のようなオブジェが飾られていて、太陽の光を受けてキラキラと光る様は非常に幻想的だ。森のあちこちから宮沢賢治の物語が聞こえてくるのも楽しかったし、それに混じって小鳥のさえずりが聞こえてくるのに、心が澄んでいくような心地がした。

賢治の学校に入って最初のゾーンはファンタジックホールだった。真っ白い空間に真っ白い椅子が、一つ、二つ、三つ、たくさん。一定の間隔を保っておかれている。あたりを見回すと、ちょうど椅子の下。多分、人の足跡を起点にして、色がにじみ出ている。赤と黄色と青、たくさん色が混じりあえば、黒になる、そんなことを習ったのはいつだったか。この椅子に座った人が、何を感じたのか。そんなことは分からないけど、暖色も寒色も混じりあってぐちゃぐちゃなはずなのに、虹色みたいなその色は今までの何よりも圧倒的にきれいだった。恐る恐る椅子に近づいて座ってみる。瞬間、映像が流れるとともに、たくさん色が視界を覆う。宮沢賢治が作品に込めた思い、この映像を作った人たちの願い、宮沢賢治への憧憬、作品への愛。数えきれないほどの思いが絡まって、美しい旋律が紡がれている。私は本なんて読まないし、宮沢賢治なんて学校でやったものくらいしか知らないけれど、少なくとも学校でやったときの数十倍も、作品について分かった気がした。一瞬ごとに消えては浮かぶ色彩に身を任せながら、彼が愛した世界に浸る。映像の巧さとともにまた目を見張るのはその音だ。効果音やBGMが見事に世界観を表現している。名残惜しくも、最後の映像が途切れるのを待って、席を立った。

「心象のいろいろはがねから」

ファンタジックホールを出て、次に訪れたのは宇宙の部屋だった。一方通行の四つの部屋を進む仕組みだ。真っ暗な壁が万華鏡のような鏡になっており、やがてストロボライト

や光ファイバーを使用し、星座や星を巧みに表現している。ランダムに光が赤や青に変化するのだが、一際きらびやかで好きだった。色合い的にもシャープな印象を与えるが、所々の足跡をたどるように白く、様々な感情の色がまじりあっている。ホールとは違い、今度は暖色が多いようで、おそらく興奮やワクワクする、というような色が見られる。パステルカラーにビビットカラーが交わってファンキーな印象だ。

「あけびのつるはくもにからまり」

次の部屋は天空の部屋。円形の空間いっぱい埋め込まれた画面に花巻の風景がいつぱいに映し出される。その躍動感、もはや自分が鳥や風になったようだった。天井から映し出された光より五つの童話が紡がれる。

「のぼらのやぶや腐植の湿地」

この続きは、なんだっけ。

「いちめんのいちめんの詔曲模様」

「え？」

ふと、後ろに響いた声に振り返る。

「ZYPPRESSEN 春のいちれつ。春と修羅、だよね」

「えと、そうなんですか。なんとなく頭に浮かんだから言っただけで自分でもなんのやつか分かってないんですけど」

「うん、宮沢賢治の中でもそう有名じゃないし。あなたくらいの年齢の子が覚えているなんて、びっくりしちゃった」

春色のワンピースを上品に着こなした、美しい女性だ。

「宮沢賢治、好き？」

「あなたは……」

「あ、そうだ。私は、川谷絵里子です。よろしくね」

「あ、はい。えと、柏木彩音、デス」

絵里子はそのまま手を天井に向けて、光で表した童話をその手に投影する。そしてもう一度問い掛けた。

「宮沢賢治、好きなの？」

「あまり、詳しいわけでもないですし、好きって程じゃないんですけど。まあ、普通？」

「だよね、やっぱり難しいもんね。彩音ちゃんは中学生？」

「あ、はい、中二です」

決して絵里子は怪しい人には見えないのだが、見えないのだが。こんなに個人情報

ラペラ喋ってしまったってよかったのか？ 今更ながらふつふつ疑問がわいてくる。

「そっか、そうだよな。あ、せつかくだから私と一緒に回らない？」

その女性がまた喜色满面といったような笑みを浮かべるものだからすつごく断りにくい。すつごく断りにくい。なんだか嫌な予感はしてたんだよなあ。

「はあ、別にいいですケド」

言い終わるや否やすぐに女性は「ついてきて」と踵を返し、すたこらと行ってしまふ。

その背景に、ルンルンというようなエフェクトが見えるのは気のせいか。

次に進んだ部屋は大地の部屋。賢治の世界に出てくるような昆虫や草木の巨大ジオラマが飾られていて、まるで小人になったような錯覚を覚える。あちこちに感情の色が飛び散って、ドット模様が調和している。幼い子供が抱くパステルカラーが多いのも納得だ。ペラペラと絵里子が語る宮沢賢治の話をBGMにして展示場内を歩き回る。ちなみに、ZY PRESENとはイトスギのことを表すらしい。それも、絵里子が教えてくれたことだ。「宮沢賢治の作品はね。難しいけど、すごく綺麗なのよ」

そんな言葉が出てきたのは、次の部屋に進んだとき、ちょうど水の部屋だった。

「あ、それ、なんか分かります」

ふわふわと揺れる水のエフェクトが美しい。支柱に入った水の中、色とりどりの光が舞う姿はだんだんと自分たちも水の中にあるような気分させていく。

「人が一番に気にするのって、色とか、形とか、視覚情報だと思っんです」

急に話し始めた私を絵里子は驚いたように見て、それから緩く微笑んで続きを促す。

「でも、彼の童話は、なんか違うじゃないですか。音とか、感触とか擬音とか全部使って書いている。すごいと思います」

「かぶかぶとか？」

「そう。かぶかぶとか、もかもかとかぼっぽとか」

柱に身を預けて目を閉じてみると、微かな水の音が聞こえてくる。よく知ってるね、とほめる絵里子に、小学校でやったと弁解する。そして、思い出した。春と修羅。いつだったか兄の教科書を盗み見た時に書いてあった。少しでも兄に近づけるようにと、兄の目を盗んでは夢中で暗唱したっけ。

「小説に限らず、自分の世界をしつかり持って、それを何らかの手段で表現できる人は、尊敬します、心から。本当にすごいと思う」

「うん、そうだね」

目を開けると、もうすぐそこに出口が見える。

「この時期はライトアップイベントとかもやってね。すごい綺麗だから見てみて」

そういうながら絵里子は出口へと向かう。その背中を追って、扉を出ると。途端に薄暗がりに飲み込まれる。パラパラと銀砂をちりばめたような黒の中をゆっくりと進む。遠くに見える広場にはつぼみのような形をしたステンドグラスが様々な色に輝き、見事に花開いている。風を切って走り出す。ところどころに置かれたオブジェも綺麗にライトアップされている。誰かの感情が、想いが、ふわふわと浮かびあがって薄暗がりを優しく照らす。水色、薄桃、レモン色、世界で一等きれいな色だ。道を示すかのように浮かぶ色の、その中を弾かれるように駆け出す。走る。走る。ステンドグラスの前まで来て、そっと触れようと手を伸ばした。少し遅れて、絵里子がやってくる。振り返らないで言った。

「昔、兄と話してたことがあるんですよ」

青が嫌いだっただ。マイナスな感情を表す寒色は好きになれない。なくなればいいなんて、思ったこともある。

「イーハトーブはどこにあるー？ って、なんか今思えば全然そうじゃないんだけど、学校で習った当時はイーハトーブがただただ幸せになれる街だって、信じてたんだなあって、兄はないって。そんなおとき話みたいに幸せなところないって言うんです」

でも、人が生きている限り負の感情を抱かないなんてことは、出来ないのだ。できることは、それをどれだけ消化させるのか。ぐちゃぐちゃの黒にするんじゃなくて、どれだけ調和するか。

「なんか、厨二っぽいし、メルヘンチックで馬鹿みたいなんだけど」

童話村では、不思議と負の感情と正の感情が共存していた。流れてくる負の感情も、嫌な感じはしなかった。悪意が悪意として存在しない、そんな世界、初めて見た。もし、この世界に生きるなら、きっと幸せに生きられると思った。

「イーハトーブはここにあったんだよって言ってあげたい。そう思いませんか？」

ゆっくりと、後方を振り返って笑う。

「兄を、家出してどうしようもないやつなんですけど、兄を連れ戻すためにここへ来ました。でも、出ていく前の兄は楽しそうで、解放されたみたいで、だから迷ってたんです」

「うん」

「やらなきゃいけないことができました。アイツを、ひっぱたいでも連れ戻す」

冷えた風が緩やかに背中を押す。風に巻かれて絵里子のワンピースがふわっと揺れた。

「ここに来た時、あなたはすっごくつまらなそうな顔してたの。でももう、大丈夫ね。」

盛岡駅に行きなさい。いいことがあるわ」

絵里子と言ったことに妙な納得感を覚えて苦笑する。

「宮沢賢治、好き？」

その言葉に一つ、頷いて微笑みを返す。夜の風に今度は抗わず、背中を押されたまま駆けだした。

ZYPRESSEN しづかにゆすれ 鳥はまた青空を截る

青が嫌いだ。寒色は好きになれない。でも、本当に優しい人は、強い人は、海の色をしている。

盛岡駅の平べったい建物を前にして、きつと東京だったらこの上にイオンの一つや二つくらいあるんだろうな、なんてことを思う。まだ空の先つちよの方が白んでいた童話村と違って、辺りはもう真っ暗だ。初日はケンジの宿というところに格安で泊まれたけど、今日こそは本当に、本当に、ネカフェとか漫喫とかに泊まるかもしれない。無理。

駅員の窓口の所まで軽い足取りで駆けていく。眠いのだろうか、半分目が閉じている駅員に向かって、問い掛ける。

「すみません。あの、青いジーンズはいて、紺の暗いシャツ羽織ってて、絵の具でベットの小汚いリュック背負った、あ、こいつ家出してんなみみたいな高校生見ませんでしたか」

「えっと、はい。恐らく見ておりませんが、ちなみにその方とのご関係は？」

「兄です」

「君お兄さんに何のうらみがあるの!？」

そのあと、他の改札に問い合わせをしてくれた上、もし見かけたら電話をくれるなどと約束してくれた。駅の階段を一段飛ばして駆け降りる。兄はまだここに来てない。なら何で盛岡？ 終わらない思考に、足をぶらぶらさせて気を紛らわす。まだどの新幹線が来るにも遠く、そもそもどれに乗ろうか迷ってしまう。今のうちに暗記物の一つでもしておこうかと、バックの右ポケットへ手を伸ばす。その手が空を切って。

パシッと、伸ばした手を誰かにつかまれて、後ろを振り返る。

「彩音、だよな？」

◆ 二日目 宮城県 鳴子峡

奇遇にも、明美とは朝食をとる時間も同じだったし、鳴子峡行の送迎バスに乗る時間も

一緒だった。ごくごく自然に隣の席に座ってきたけど、たまに明美が面白がるようにこちらを見やるくらいで、何も会話を交わすことはなかった。

比較的ゆっくりとした速度で進むバスの窓を眺める。八月にもなるのに、木々は深緑と人には微妙な色をしている。鳴子口というところでバスを降車して、そこからは遊歩道を歩く。緩やかな傾斜をしばらく上ったら、ようやくと明美が

「ここ行ったら回顧橋だよ」

と、話しかけてきた。よく耳をすませば、水がさらさらと流れるような音が聞こえてくるような気もするが、木々で覆われてよく見えない。そのため、少し前を歩いている明美に追いつこうと駆け足になる。だんだん視界が白んで、バン、と視界が開けた先で。真っ先に目に入ったのが木々の茶色だったから、なんだか笑ってしまった。見渡しても見渡しても、山一面が木々で覆われていて、ああ、これが深緑なのかと、すんと腑に落ちた。パレットの上ではいくらでも対面したことはあるけれど、現実にそうじっくりくる色を見かけたことはほとんどなかったのだ。

「秋だったら大深沢橋の紅葉だけだ。夏だったらやっぱり回顧橋だよね」

デッキがある方が君もお絵描きしやすいだろうし、そう続けられた言葉に若干の反発を覚える。お絵描きってなんだよ、お絵描きって。

「君、こっからどうすんの？」

「……決まってるんですけど、岩手方面に行こうかなとは」

「そっか」

じゃあ、と思いついたように明美は笑う。

「車、乗せてってあげようか？」

「……は？」

「私の学校、岩手方面だし。途中までだったら乗つけてあげられるよ」

「いや、アンタ教師なら止めるとかなんとかしろよ」

「美術教師なんてみんなそんなもんじゃない？」

「全国のお美術の先生に謝ってください」

カラカラと景気良く笑う明美をジーっと睨んで、そしてふと我に返る。

「え、あなた美術教師なんですか!？」

「言ってるなかったけ？」

「聞いてませんが？」

明美が、教員の名札をひらひらとかぎす。そこにはしっかりと氏名と高校の名前、担当教

科が美術だとか、色々書いてあったので犯罪臭は薄まったが、謎は増えた。本当なんなんだこの人。

「まあ、いいや。じゃあ私はしばらくここらぶらついた後、周辺視察でもしてるから。十四時集合でいい？」

呆然としている間に、オッケーじゃあ決まりだね、あとでねー、何ていうのんきな声があたりに響いて、慌てて周囲を見回すもすでに姿かたちもない。え、なに、結局俺も行く流れになってんの？　とうに遠くに行ってしまった背中に対してため息を吐く。ほんとうになんなんだあの人。

夏休みなのに展望デッキはかなりすいていて、時間帯もあるだろうがかなりゆったりと絵が描けるようだ。

水の流れに視線を向けて、下を覗き見れば深い谷がある。木々の隙間から見える岩肌は、ごつごつとがっている。少し迷って、結局滝を中心に据えて絵を描くことに決めた。滝より森なんかの方が苦手なのでそれを主題にしようかとも思ったが、滝なんかがあった方がいかんせん華がある。

画用紙を広げると、まず濃い目の鉛筆を手にとって下絵を描く。消えないと困るから、濃い目の鉛筆で薄く書くのだ。もっともらしく鉛筆を持った手をピンと伸ばして、目を細める。別にかっこつけてるわけではなくて、相似の比率を取るためのもの。別に凝ったアングルでなくとも最初に大まかな構図をイメージするのだが、その時に相似が狂うと一気に萎えるのだ。

ある程度アタリを取ったら次は下書き。散る水しぶきの一つ一つ。大きく飛び出る木の幹と葉。下書きの段階で決して精巧に書くわけでもないが、一筆一筆、丹念に趣向を凝らす。色の塗り方もそう言えるが、線画一つでその人の性格が最も出るためだ。

すると、

「みーなとくん」

いつ戻ってきたかもわからない明美の声に、強制的に絵の世界から意識が引き戻される。

「うわ、それっぽいじゃん。やっぱ絵うまいよね」

「やっぱって。俺の絵、見たことあるんですか」

明美が俺の絵をのぞき込んで、批評家よろしく頷いた。微妙にうざったく思いつつも、筆は止めない。

「君さ、自分が思うよりも有名だと思うよ。名前聞いた時点であの子かって思ったもん。腐っても、美術教師ですし。うちの三年が君に何人泣かされたか」

その声にピタッと、動きが止まる。

「じゃあ、俺が、最後に落ちたのも知ってるんですか」

明美がちらりとこちらを一瞥した。観光客がはしゃぎまわる声があたりに響くのは反対に、俺たちの周りだけ何度か気温が下がった気がした。

「いや、それは初耳。まあ、今回いないなあって思ったけど」

「そっすか」

「でもね、君の絵は何個か見たことあるんだよね。確か最新のが夕焼けのやつだっけ。あ、やっぱりアレ出したの？」

訝しがるように緩く睨みつけると、明美はまた面白がるように肩を揺らした。そして、フツと真面目な顔に戻る。

「ずっと、なんで君が選ばれてんのかさっぱり分からなかった」

「……」

「うまいよ。とてつもなくうまい。センスもあるし、才能もある。多分私の絵なんかよりよっぽどうまいと思う。うん、ほんとに」

だらりと柵にもたれかかる明美をまじまじと見つめると、こちらを窺う双眸がスツと細められた。

「でも、それだけ」

「はあ？」

思ったよりも地を這うような声が出て、我ながら驚いた。その様子に苦笑されてしまう。

「なんか描いてて楽しくなさそうだなんて、そんな絵なんだよね」

夕焼けのとかさあ、特にそんな感じ？

「君さ、色塗り苦手でしょ」

「は？」

一風変わってからりと明るい声に、今度は純粹な疑問で声が漏れる。

「線画見てる限り、こっちは楽しそうじゃん。線が生き生きしてる」

「何ですか、それ」

「じゃあ、この楽しいな雰囲気もなくなっちゃうくらい色塗り嫌いなんだろうなって」言葉に詰まって、少し息苦しくなる。目を伏せたまま負け惜しみを口にする。

「別に、色塗りなんてその絵を構成する一要素でしかないんだから。それに俺の絵知ってるなら評価も耳にしたことあるでしょ。繊細な色遣いが良いっていう」

「あー、結構みんな言うけどさ。あんまりそうは思わないな。写実的すぎるっていうか、

いい子過ぎる？ もっと遊んでもいいと思うんだよね」

ふと隙間風が吹き抜ける。それを皮切りにへらつと笑うと、重かった空気が霧散した。「つたくもう、勘弁してくださいよ。なあんでわざわざ傷口抉りに来るかなあ。え、じゃあ俺に近づいてきたのも偵察ですか？」

明美がぼかんと目を丸くするが、すぐにこちらの意図を汲んだのか、作り物めいた笑みを見せて柔和な声を出す。

「いやいや、違うよ。それはただの善意」

それを聞いてそつと安堵し、いくらか頬を緩ませる。明美も、一つ大きく伸びをして、「私、大深沢橋の方行ってくるから。あとでね」

と、踵を返す。あちらもあちらで虫の居所が悪いのか、さっさと行ってしまった。

完全にその姿が見えなくなってから、あーと大きく唸り声をあげる。居心地の悪い時間に区切りをつけてなお鬱屈とした考えがぐるぐると思考を支配する。その日の気分やモチベーションがストレートに絵には出るので本当に勘弁してほしい。絵に嘘は吐けないのだ。再び絵に向き直って、線画を仕上げる。スケッチブックを少し離して、全体の調整。ふと、席を立って一、二メートル遠くから見してみる。

線が躍っている。

あまりいい意味で使うわけでもないのだが、これを形容するにはちょうどいい言葉だろう。線が微妙にはねていて、少しの抜け感があるからか、明美の言う通り楽しそうな絵に見える。

耳が痛かった。全部心当たりがあるからだ。明美が言ったこと全て、心当たりがある。そうだ、絵を描いていて楽しいなんて思ったことが、幾度あったのだろうか。

「才能、ねえ」

才能があると持て囃されてきて、その度へらへら笑って、その実、心の中でずっと否定してきた。センスは人より少しあるのだと思う。感性に筆を委ねて書くことだって少なくはない。けどもし、俺程度で才能があるなんて言うなら、この世界の神様はよほどのポンコツだ。

世間ではそうは思われていないかもしれないが、水は別に描くものではない。人それぞれだし、海や川などはまた違うのだが、俺は滝でまず水を描かない。最初に線画を注意深く見て画用紙のぼかしたいところに水を張る。

最初に木々を描くのが無難だろうか。同じ緑でも、最初はライトな色から暗い色へ段々塗り重ねていくなど、水彩画に限ったことではないが最低限の決まりがある。

細部は後で詰めるとして大まかに描きあがったら滝を描き始める。画用紙の白を最大限に生かす。そのために描くのは岩だ。灰色の絵の具をパレットに乗せ、上から下に刷くようにして筆を動かす。下方を水で濡らしてぼかすと、ちょうどよく水しぶきが表現できる。岩の角にぶつかって、水が跳ね散る。キラキラと光の反射する水しぶき。吸い込まれるように落ちていく。蝉の声が滝みたいに降り注いで、その合間に川のせせらぎが聞こえる。全部、描きたい。全部、全部。描けたらいいのに。色、形なんかに固執しない。あたりにさんざめく音。風が吹く。太陽の暖かさ。最高の瞬間をフレームに写し取る。そういうものを全てこの絵に落とし込んで描けたらいい。夢中で筆を動かす。太陽の位置がじりじりと変化して、影が動き回るのに、舌打ちを一つ。記憶を頼りに筆を動かす。

時も忘れて、いよいよ完成というところまで来た時に、はたと考える。

描きたい、とここまで鮮烈に求めるのは、楽しいというのと何が違うのだろうか。部活も勉強も、いまひとつ本気でやった記憶はない。絵を描くことは、自分と向き合うこと。絵を描く時、視界はモノクロ色に染まって、その分少しだけ感覚が鋭くなるのだ。惨めなことも多かったけど、こう描けば最善なんているのがない、息が詰まるような感覚は結構気に入っていた、のかもしれない。

空の色は青だと教えられて初めて青と認識する。絵を描く時は自分が今まで経験した「楽しい」とはどれもかけ離れている。食欲に求める感覚は「楽しい」という感情とは程遠い。

ぐるぐると同じところを回る思考をいったんリセットして。今日一番に気を張って、最後の一笔を入れる。久しぶりに何も考えずに描いたからか、雑さは垣間見えるが勢いのある作品となっている。——考えて、考えて、ぐちゃぐちゃになって描いた作品よりかは幾らかいい。

「夕焼けよりかは、断然マシだね」

「——え？」

そうやって、いつも傷口を抉る。だから疲れるんだ、あなたと喋るのは。

「いや、ね。そういえば私たち昼ごはん食べてないな、って思って。お腹すいてんだろなって思って帰ってきちゃった」

時計を見ると確かに十三時半。遅くも早くもない丁度いい時間だ。慌てて手を洗いに行こうと立ち上がるが、近くに蛇口なんてないから水筒で代用していたことを思い出す。そ

れを見かねた明美にウェットティッシュを差し出される。恥ずかしい。

「楽しそうかって聞かれたら普通だけど、断然雰囲気よくなってる」

何？ 夕焼けのアレはスランプかなんか？ と、すぐく無遠慮な言葉を投げかけられたので、仏頂面で睨んでやる。もう、なんか、うん、慣れた。

当たり前のように床に腰を下ろす明美を見て、俺もそれに倣う。そうするとコンビニで買ったおにぎりが四個差し出された。選ばせて、くれるのかな？ 一応その分別はあるらしい。二人してならんでおにぎりを頬張る。はたと思いついたように明美が問い掛けた。「ここ、すっごい綺麗だと思わない？」

数秒逡巡して、口を開く。

「別に、ふつう、ですかね」

少し感じが悪いかと思ったが、明美には散々いろいろ言われてきたので気にしない。

「青が好きなんですよ。で、赤とか緑とかは嫌い」

「あー、服見てもそんな感じする」

確かに今着ている服も昨日着ていた服も寒色系の青でまとめられていた。

「で、ここはなんか緑みどりしすぎてて、気持ち悪いっていうか。もはや一周回って清々しいくらい緑だから、逆にここの緑は嫌いじゃないです」

「要するに、プラマイゼロで普通ってこと？」

「そうですね」

早くも食べ終わったららしい明美が、くあつと気の抜けたあくびをする。

「初めて君の絵を見た時さ、もったいないことしてるなって、そう思った。見てて楽しい絵、描いてて楽しい絵。この子の絵がそうなれたらどれだけ伸びるんだろうって」

そよそよと風が吹いて、なんだか体が軽くなった気がした。アンタに何が分かるのかとか、返せる言葉はいくらでもあった。けれどそれを返す気にならなかったのは、本当は氣付いていたからだ。この人の言葉には終始悪意が一切ない。

「私も美術教師だからさ、会うことなんてないんだろうなって思ってたけど。もし、会うことがあったなら教えてあげたいって」

「……」

「絵って、もっと自由に、楽しんで描くものなんだよ」

写實的に描くだけだったら、写真で事足りる。そう続けられた言葉に、そっと唇をかむ。分かっていただけだ。ずっと前のいつか、いつかも聞いたことがある。この人は人の痛いところをいつもひっかきまわして、へらへらと笑みを浮かべる。それになんとか腹が立つ

て、気づけば口に出していた。

「俺、最後のコンクールに落ちたこと、全然悲しくなかったんです」

「……」

「もうこれで推薦来なかったから美大にはいかないって親と決めてたんで、それは悔しかったんですけど。でも、絵が選ばれなかったことは別に悔しいと思わなかった」

横目で明美の方を窺うと、何か考えているようだった。

「才能なんて碌にないのに才能があるとか言われるのもムカついたし。きっと、なんでしょね。そういうことの当てつけみたいに描いてたんです。だったら、楽しいも何もないでしょ」

「……今は楽しい？」

「……さあ、どうでしょう。わからないです」

数秒か、もしくは数十秒か。長い沈黙の後にやがて、口が開かれる。

「じゃあ、もし君が、本当に絵を描くのが楽しいと思えるようになったら、私に連絡してくれない？」

「……まあ、いいですけど」

何をしてきたんだろう、そう思った。楽しくもない、自由に描くなんてきれいごとが空虚な心を滑り落ちていく。一度だって楽しいと思ったことない。絵を描いていて、楽しいと思ったことはない。今まで、何をしてきた、何を、何で、何で。

パンっ、と思考を遮るように、明美が手をたたいた。ふわり、笑みを浮かべて口を開く。

「それと、さ。その絵、良かったらくれない？」

◆ 二日目 岩手県 盛岡駅周辺

「へー、あの湊君が家出ねえ」

「そう、だから追っかけてるの」

「じゃあさ、俺んち来る？」

「ん？」

「……湊君は東北一周したいんでしょ」

「かもしれないってとこだね」

自販機で買った水っぽいお茶を流し込みながら、案内板にもたれかかる。流石に一九時にもなれば夏でも暗くなるのかと、改札の外を見つめた。

「だったら、どうせ秋田通るんじゃない？」

「あー、そうね」

「大体さ、お前もお前だろ。なんで、考えなしで飛び出してきちゃうかな。どうせ泊まる
ところ、ないんだろ」

「おっしやる通り」

ハハ、と乾いた笑みが漏れる。今しがた、手を引かれるままに後ろを向けば、そこに
いたのは幼馴染の倉本葵だった。葵は女のような名前を付けられているが、れっきとした男
である。家が近かったのだが、小学校から中学にあがるタイミングで秋田へと引っ越して
しまった。兄とも面識があり、幼い頃はよく懐いていた。

「俺、岩手に用事あったんだけど、今終わったとこで。これから帰るから。ついてくんな
ら、親に言うよ。お前なら泊めていいだろ」

「え、マジ？ なら、ぜひお願いしたい、デス」

片言の敬語に葵がフハ、と笑う。ポケットからスマホを取り出して、電話をかけ始めた。
しばらく会話は続いて、

「いいってさ」

無事、許可はもらえたようだ。秋田新幹線の券売機へとゆっくりと歩いていく。

「湊君、何処に行くとか、心当たりないの？ てか携帯は？」

「スマホは切ってるほいよ。何処に行ったかは……絵、描きに行ったみたいなものだから、
映えポイント？」

「映えポイント……」

オウム返しに言ってくる葵に、肩を揺らして笑う。すると、抗議の意を込めてか、下唇
を突き出したぶすくれた表情を見せてきた。

「てかお前、マジで探す気あんの」

いや、あるある、胸元で手を振って答えれば、ジーンと半目で見つめられる。

「お兄ちゃんには、ちゃんと帰ってきてもらわんと困るから、探すは探すけど。あの石頭
は満足しないと梃子でも動かないじゃん？」

「あー、分からなくも、ないが」

「だから、ゆっくり探しましょ、ってなことよ」

「オイオイ」

「それと、お兄ちゃんに、世界を見せたい」

その言葉に葵がハーッとため息を吐く。

「……湊君が順当に回ってたとして、秋田につくのは明後日か明々後日だよね」

「天才か？」

真面目なトーンで呟くと、苦笑いされる。

「まあ、いいや。秋田の、あー、絵描いたら良さそうなところでしょ。じゃあ明日から、俺が秋田、案内してあげる。無鉄砲に探すよか、いいんじゃない？」

葵のことをまじまじと見つめると、何？　と言われてしまう。一泊置いて、言った。

「天才か？」

「本当に盛岡駅で良いの？」

「はい」

明美が、俺が車に乗るのを待ってから、ハンドルを握りしめる。一四時に鳴子峠を出たのに結局鳴子温泉を発つのは一七時になってしまった。だが、一応は送ってもらっている立場なので、かなしいかな、文句は言えない。

「私の学校そこらへんだから、いいけど。……送ってっただけいいんだよ」

「え、今更罪悪感でも湧きました？」

「引くな引くな。てか、そもそもどこ行くの？」

「行くあてはあるんで」

「ならいいっす。文句ないっす」

「文句はあれよ教師なら」

アクセルを踏み込み、緩やかに自動車が加速する。別段話すこともないので、ゆっくりと流れる窓の外を眺める。車内には、心地良い沈黙が流れていた。

その沈黙が破られたのは、岩手に入っただいぶ経ったかというときだった。

「君さ、絵を描く時、色を濃淡で見分けてるでしょ。アレ、やめたほうが良いよ」

「そうですか？」

「まあ、人のやり方にとにかく言うつもりはないんだけどね」

ちらりと一瞥して、また外の景色を眺める。そんな俺を尻目に、明美は技術面で言うことはほとんどないんだけど、と前置きをしたうえでアドバイスを始める。それに半分聞いていない体を装いつつも耳を傾けると、それを知ってか知らずかクスリと笑われてしまった。

「私もね、美術教師なんてやってるけど、美術がちよっとばっかしかできなかっただけで、大した頓着なかったんだよね」

どう答えればいいのかわからずに沈黙する。

「絵を描くのが楽しいって気づいたのも最近だし、すごいもったいなくなって気づいたのも最近」

夏休みに入ったばかりなのに、こちら側の車線は驚くほどにすいていて。すいすいと進む車が、淡々と語るその言葉を余計に空虚にさせた。空虚な言葉が、空間に弾けて溶ける。「きついこと言っちゃったけど、君には後悔してほしくない。もったいなかったって思っ
てほしくない」

もったいねえって、もう思ってるよ。

「私、君の絵のファンなんだよ。白い、ハマナスの花の絵、あれ見た時からだから、何気にファン一号なんじゃないかな？ 君は、今まで見た誰よりもさい「才能、ないです」

一日最低一、二枚、B4のクロッキー帳にデッサンその他。熱が出ようがお構いなしに、小五から毎日毎日続けてきた。色塗りだって、苦手だから誰よりも研究した。人体模写も、風景も、油絵も、水彩も、満遍なく。その積み重ねの上に、立っている。

「……ないっすよ」

で、俺は、

「俺は、頑張ったんだ」

「……なら尚更じゃん？」

あんたは、知らないだろ。ずっと憎むみたいに、復讐みたいに絵を描いてきて。ムキになってやってても本気で向き合ったことなんてない。それで、ちよっとだけ本気でやれたら、それはさぞよかったんだろうなって思ってる。知らないだろ？ だって知る由もない。高速を滑らかに降りる。再び降りた沈黙を次は自分で破る。

「高校、盛岡なんですか？」

「いや、もつと近いよ。今日は用事があるだけ。流石にこっから二時間かけて修学旅行に行くわけにはいかないからね」

「ああ、そうですね」

そうこうしているうちに盛岡駅が見えてくる。流石に二時間以上もかけて盛岡まで来たら、辺りも暗くなる。駅に滑り込んだとたんに扉から荷物ごと追い出された。

「じゃあまたどこかで！ 多分会わんけど！」

なんていう情緒の欠片もない挨拶を残して、あつという間に車は遠ざかる。盛岡駅まで来たのとまったく同じ道をたどる車に向かって、深く、深く頭を下げた。

おせっかいな人だ。教師らしくなくて、というか教師としてあるまじき、というような

行いをボンボンやる。破天荒で、変人。だけど、すごく温かい人だ。

向き合えたらいい。いつか本気でやれたなら。

そんなことを考えながら、十九時の盛岡駅に背を向けた。

「すみません。川谷美術館ですよ。約束の者ですが」

美術館の洒落たドアを引くと、喫茶店さながらにカランコロンとベルが鳴る。

「あら、ようこそ。母さんが言っていたお客さんかな？」

「お客さん、というか。はい。まあそんなところですよ」

応対してくれた品の良い女性は、その雰囲気こそぐわす大きな絵を抱えて、ちょうど作品の取り換えをしているようだった。思わず手伝おうと、手を伸ばす。

「ああ、大丈夫よ。長旅で疲れているだろうから、今日はもう休んでね」

「いえ、そういうわけには。色々手伝う約束で来たので」

「ああ、そのことなだけで……」

女性が作業の手を止めて、こちらに向き直る。

「湊君には、絵を描いてもらおうと思って」

「……はい？」

たつぷり十数秒の間をもって、間抜けな声が漏れる。

「私とは初めましてだよ」

「えっと、まあそうなんですけど」

訂正、品が良い、育ちが良い、故に勝手に話を進める。そしてこれまた厄介なのが、ニコニコと気の良い笑みを女性が浮かべるものだから、話を遮りにくい、すごく。

「改めまして、川谷絵里子です」

◆ 三日目 盛岡駅周辺 川谷美術館

川谷美術館は、美術館を騙ってはいるが、実際はギャラリーと呼ぶにふさわしい規模だ。中学生の時の夏休みの自主学習で、仲の良かったグループと訪れたのをきっかけに、なぜか親しくなった。

決してたくさんあるわけではないものの、四季に沿って取り揃えられた、店主にとって思い出の作品の数々はどれもセンス良く配置されている。夏だからか全体的に涼し気なブルーでまとめられながらも、温かみのある店内に当時圧倒されたことを覚えている。

作品全体を見渡さる位置にこじんまりと置かれた机。話を聞けば、そこから絵を描いて

ほしいということだ。顔見知り故かお手伝いという名目で呼ばれたわけだが、実のところは絵の依頼だったらしい。ただ、せっかく男手があるのに何もせず、絵だけ描いているというのはいささか分が悪い。午前中の力仕事と皿洗いをする権利だけはもぎ取った。

据え付けられた椅子に鎮座して、構図を考える。寒色系が多用されている店内で、温かみを出すにはどうするか。その時「君さ、色塗り苦手でしょ」、そんな声が頭をよぎった。色塗りに頼らないで書くとして。なら、タッチを変えるのか？

店内をよく観察してみると青系の絵画に、窓からの光が漏れてちらちらと黄色く光っているところがある。海みたいだ。海の中から見る、太陽みたいだ。作品のタイトルは、たしか「空」のはずなのに。「空」ってタイトルのくせして鯨が泳いでいる。ああ、そうか。夏だから海なのか。

その時、カラン、とベルの音が鳴って、ぶわりと熱気がドアから入ってきた。眉を顰めて振り返ると丁度絵里子が帰ってきたところだった。日本の夏は湿気が多い。これでも東北はかなりマシだそう。地理で東京のあたりなんかはさらにひどいと習った。ぬるま湯をそのまま気化させたような熱い風に辟易として、のろのろとしまるドアを睨みつける。

「風死すや、だよね」

「……季語？」

「そう、夏に風が吹かなくなる時のこと。東北なんか多いって聞くけど、全然ないよね」

「勘弁してほしいですよ、この暑さ」

麦茶入れるよ、と奥に引っ込みそうな絵里子を慌てて引き留めて、椅子に座らせる。絵里子は仕事に行っているの、いたりいなかったりするのだ。熱中症になってしまいうるな逢魔時。やっと幾らか日差しが和らいだかという頃だ。

「行き詰ってるの？」

「まあ、最近調子悪くて」

その言葉に、大変な時にごめんね、と眉を下げるのを見て慌てて否定する。

「俺は全然いいんですけど、でも、ご期待に沿った絵を描けるのか」

「そう？ 母さん、湊君はとっても絵がうまいんだって言ってたよ」

「ハハハ……」

空間に乾いた笑いが零れる。若干の気まずさは感じたが、絵里子は特に何も感じていないようなので、スルーすることにした。

ふと、初めて来たときに描いて、それからずっと飾られている作品を見つける。ハマナスの白い花の絵だ。

——初めて来たとき、空間ひとつが、まるで一つの美術品のようなと思った。友達がいる前では無気力風を装って。忘れ物をしたと駅前で別れて、来た道をもう一度。バンとドアを開け放ち、冷房の効いた空間に生ぬるい風が一気に流れ込んだ。それから、そうだ。紅茶を入れてもらったんだ。そうして——この後、どうしたんだっけ。

「宮沢賢治童話村って知ってる？」

「へ？」

「昨日は日曜日だったから、行ってきたんだけどね。そこで面白い女の子にあったの」

「そうなんですか」

「盛岡駅に行くって言ってたんだけど、会ってない？」

「？ 会ってませんけど」

そっかあ、何とはなしに絵里子は呟く。そして唐突にこちらを見て、笑った。

「その子がね、すごいって言うの。自分の世界を素直に表現できる人は、すごいんだって」

「いいこと言うんですね」

「うん、まだ小さいのに宮沢賢治とか好きなんだって」

「マセガキだ」

ふは、と無邪気に笑いをこぼして、それから絵里子は静かな声で言った。

「君に似てたよ」

——紅茶を啜って、それから、それから。——ポン、と肩に手が置かれたんだった。

君に似てたよ。その言葉を自分の中で反芻して、かみ砕いて、自分なりに答えを出す。

「それは……その子がかわいそうだ」

出された言葉に、絵里子は静かな笑みを浮かべる。だがその瞳はどことなく悲しそうに見えた。

「男の人と女の人では、見える世界が違うって知ってる？」

「さあ、知りませんでした」

「なんかね、女の人より男の人の方が見える色の種類が格段に多いんだって」

「ああ、それなら聞いたことはあります」

「それでね、ゴッホやターナーの世界を私たちは見れないし」

「……」

「ピカソにとっては世界があんな風に見えてたのかもしれない」

「ピカソ、マジか……」

「あと、そうだ、最近四原色見えるって言う女性画家もいるらしいのよ」

「四!? 赤と青と緑だけじゃなくて?」

「そう。そしてその逆もある」

軽くアタリだけつけた鉛筆画を手を取って、絵里子がふわりと笑った。

「一人ひとり自分の世界があって、それを形にして誰かに伝えられるのは、本当にすごいことなのよ」

優しい声音で大切に言葉を紡ぎだすさまに、何も返せない。茶化してごまかしたいとも思うが、そんなことのできる空気でもない。何なん? 最近こんなんばつか。

「湊君には、自分が見ているありのままを描いてほしい」

それが今回の依頼です、と締めくくる絵里子に俯いた顔を上げられない。

——そうして、ポンと肩に置かれた手から伝播する温もりに、はらはらと涙をこぼした。

一言二言、言葉を交わして、絵里子が二階へ引つ込む。一階には紅茶やお菓子を出す程度の台所が備わっているが、基本的に居住スペースは二階からだ。入れ替わるようにして、店主で、絵里子の母、川谷京香が姿を見せた。

「ごめんなさいね。絵里子がいろいろ言ったって聞いたから。あの子ポヤポヤしてて、何言ってるか分からないでしょ」

どこで育て方間違えたのかしら、と京香は首を傾げる。イエ、大正解だとオモイマス。

ふと、京香の纏う雰囲気が変わる。

「看板、見た?」

眉尻を下げて問う京香に知らぬふりはできなかった。

大規模開発、盛岡駅周辺を筆頭にいくつか大規模な開発をし、仙台のベッドタウンにする。東日本大震災を顧みた政策だ。

「うちなんて、もうど真ん中ですよ。うちがOK出さないと始まらないんですって」

極めて明るい声を出そうと努める京香に、かける言葉は見つからなかった。

「粘ってたけどねえ。いよいよよかなあ」

カチャカチャとコーヒーを喫茶店さながらにドリップする京香。後ろ向きに立っ

表情は見えないが、ひどく寂しい声だ。

「だから、湊君が描く絵が、正真正銘の最後一枚になるかもしれない」

なんて、プレッシャーかけちゃったかな。からりと響く声がうわっ滑りする。

「何で、俺ですか」

「終わらせてほしかったの」

中学生の時と比べると幾らかくたびれた顔を、俺に向ける。

「この小さい美術館を終わらせようか迷ってた時に、あなたが来て、泣きながら綺麗だと
言ってくれたのを見て、続けなきゃって思ったの」

「……」

「でも、この美術館が無くて、いくらでもここに飾っている絵を見る方法ならあるって、
気づいちゃった。だったら、どうせなら終わらせるのは貴方がよかった」

ふざけんな、と思う。どいつもこいつも人の都合なんて、これっぽっちも考えてない。

「ねえ、終わらせて」

でも、その声音が知らせるのは、どうしようもない悔恨で、きつとこの人が一番諦めら
れないんだらうなど、諦めさせてほしいんだらうなどと分かったから。この人が満足できる
作品を描かなければいけない。諦めて、楽になってほしい。やめてほしくない。最高の作
品を描かなければいけない。——やめてほしくない。

どうしようもないことを抱え続ける苦しさは、知っている。

四日目、午前中の力仕事が終わって、早めの昼食を済ませたのち、再び絵と向き合う。

俺の見たままを描く。最高の瞬間を描く。俺が一番好きだったあの日の昼下がりに。

色鉛筆画。柔らかい雰囲気とリアリティの両方を表現することができる。色鉛筆は様々
な本数で売られているが、基本的に使用するのは十五色だ。水彩画のように基本の色を混
色して描く。グラデーションなども多用することで表現に幅が生まれるが、その場合は色
相環で隣り合う色を使用しなければならない。平塗りやハッチングなどその塗り方は鉛筆
画と同様にさまざまな種類がある。

薄い筆圧で描かれたラフ画に沿って、水色で陰影をつける。次に黄色。だんだんと陰影
を濃くしていく。ラフ画の鉛筆の線は温かみを出すために濃く黄色でなぞった。

ダークブラウンでまとめられたレトロな部屋に、涼し気な作品が不思議と調和している。
決して多いわけでもなく、むしろ少ない位の客が絵画を通して、談笑する。それを温かく
見守る店主の京香。紅茶を片手に微笑む。木漏れ日。海。空。太陽の光がちらちらと、ガ

ラスを一枚挟んで混じりあう。あふれる笑顔。冷房の効いた店内。町の憩いの場。

空間が一つの作品、それをB5の画用紙一枚に、落とし込む。当時俺は、憎むように絵を描いていた。今もそうだ。青も黄色も好きだったけど、茶色は好きじゃなかった。内装全部が暗い茶色のこの店で、俺は一時、それを忘れた。

青に黄金色が交わる。例えるなら、海から見た空だ。全部、表現したい。俺が見たままを閉じ込める。写真を撮るよりは、幸せな嘘を吐く。開発で廃れたこの地区に、もう一度笑い声を。夏の蒸し暑さでやられた町民が、涼しいここに逃げ込んで、仕方ないなあ、と店主が紅茶をふるまう。もう二度とない光景を、優しい嘘をこの画用紙に閉じ込める。

そうして、最後の筆を入れるまで、俺は憎しみを忘れた。

「そっか、そっかあ。湊君の世界はこんな風に見えてたんだ」

絵を見せに行くと、京香は嬉しそうに目を細める。疲れているだろうとお茶を出してくれた絵里子は、早々に奥へと引込んだ。綺麗だねえ、京香がうわ言のように呟く。

「幸せだねえ」

深い青の「空」を中心に据えて、それを挟み込むように京香と客たちが笑って談笑している。絵里子の運ぶお盆にはティーカップが何人分も乗せられており、和やかな雰囲気からは賑わいが示唆できる。そして、空間全体に降り注ぐ木漏れ日。

「きつと、どうしようもないことってこの世にあって。この美術館を手放すのはすごく、嫌だけど、私一人がどうしたって、どうにもならないのよね」

分かっていたことなのよ、京香が笑う。

「空」は、今日来て初めて見た作品だ。去年も一昨年も、中学の時なんて絶対なかった。おそらく店主が閉店間近にわざわざ買い取ったものだ。それを中心にして中学当時の活気を表現する。込めたのは、これからずっと、この美術館が町民の憩いの場となればよいという祈り。

「でも、こうやって絵の中では、未来が紡がれていくなら、もういいか」

つうつと京香の頬を涙が伝う。反対に、その声音はとても満足したようなものだった。

「私、いつもあなたに救われてるわ」

違う。今だって、あきらめたくないと思っっているあなたに、勝手に苦しんでいると決めつけて、自分勝手な祈りをぶつけて、こうやって涙を流させた。店を諦めさせようとする、それはただのエゴに違いなかった。むしろ、むしろ。

「救われているのは、俺の方だ」

——無意味って気づいていた。技術力で言ったら、中学生の俺といい勝負だ。有名な画家なんかと比べたって、決して華のある絵じゃない。でも、その絵から伝わる優しさに、肩口から広がる温もりに、敵わないって思ってしまった。

「俺はっ」

涙を流したわけじゃない。代わりに、嘔みつくように吠えた。慟哭した。

「俺は、最後の絵を任されている、人間じゃない」

知ってますか？ 無理矢理にも笑みを浮かべる。きつと不細工な笑みだ。

「絵を描いてたって、楽しくなんかないんだ。馬鹿にしてきたやつらへの復讐みたいに、そんなふうに描いてた、今も！ バカみたいだろ？ そんな奴の絵が、きれいなわけ、あるもんかよ」

だから、だから、あんたは。

「アンタは、やめなくなたっていいんだよ。こんな奴の絵が、最後だなんて、そんな馬鹿なことあるかよ」

——絵は、自由に描いていい。楽しく描いていい。初めて泣いた子供みたいに、しゃくりあげるように泣いた俺に、かけてくれた言葉。

完璧主義で、一度やったら満足するまで突っ走る俺は、小五の時に絵を描き始めて、あの程度は描けるようになった。でも、どの作品でも、満足できたことはなかった。どんづまってたんだ。それで、上手い下手でもなく、どうしてか敵わない作品がこの世にはあるって気づいた。

しばらく泣いて落ち着いた俺に、京香はペンと紙を持たせた。

「自由に描いていいんだよ」

ハマナスの絵をあの絵の中から除いたのは、偶然ではなかった。

本当は、あの頃から、絵を描くのは楽しいって分かっていた。忘れてただけ。あなたに言われたことも、時が経つとともに忘れて、俺はまた、憎むように絵を描いた。

「俺ね。コンクール落ちたんだ。今まで大体さ、いい成績残してたのに。親と決めて、美

大行くか行かないかの瀬戸際ってコンクールで、掠りもしなかった。笑えるだろう？」

ふは、と無機質な笑いが口から零れる。

「でもさ、全然、全然、悲しくない。悲しくなかった。今もそう。絵描くのだって。昔はちょっと、楽しかったんだよ？ うん、少なくともここにいる時は、楽しかったのかな。でも、俺、今楽しいなんて思って、絵、描いてねえよ？」

いつの間にか、泣くこともできなくなってしまったのか。年甲斐もなく喚き散らした方がまだ無様じゃなかったんだろうかと、ふと考える。

「でも、何でだろ。ハハ、ほんと今更、なんだけど。俺、——一度だって絵と本気になって向き合えなかったこと、すつげえ悔しいや」

絵を描くことが楽しいとは思えない。俺にとって絵を描くこととは、コンプレックスと向き合うことと同義だからだ。でも、絵を描いてそれを見た京香さんの、俺の絵を見てくれた人たちの喜ぶ顔を思い浮かべるのは、ほんの少し楽しく思えたような気がするのだ。

「湊君は、頑張っているね」

はらりと一粒、雫が頬をしたたり落ちた。

◆ 四日目 秋田県 男鹿

「海行こうよ！」

そう葵に声をかけたのは四日目の昼下がりだった。三日目は結局歓迎やら何やらで碌に観光地を回れなかったので、転寝していた葵をたたき起こしたのはささやかな報復だ。

「あ？」

「機嫌悪いなあ」

「……たたき起こされたんだ、分かるだろ、いや分かれ」

「だってアオくんが天日干しされたらいやじゃん」

「どんな世界線だそれ？」

葵がソファからいやいや体を起こす。

「海とかさあ、いそうじゃん、ヤツが」

「ヤツ……」

ハーッと特大のため息をついて、葵は言った。

「ゴジラ岩、近くに叔父さんの家があるんだ。行くか？」

「何それ行きたい」

葵は重い腰を上げて、ペットボトルの冷えたお茶などを準備する。

「サイクリングしようよ」

「……一応、自転車は借りられるけど、お前最後に乗ったのいつだよ」

「うーん、三年前？」

「お前……正気か？」

「まあ、乗れる乗れる！」

自分のお茶を鷲掴んで真っ先に玄関に向かおうとすれば、葵がタオルなど必要なものが入ったカバンを投げてよこしてきた。ちなみに、選ばれたのは、綾鷹でした。

「……アオくん、……いいお婿さんになるね！」

「嬉しかねえよ」

「男鹿と言えば、なまはげだよね」

「あー、いるな」

「前から思ってたんだけどさ、男鹿駅って良い雰囲気だよね」

「おう、お前来たの初めてだけどな」

男鹿駅のなまはげの銅像を前にして、何とはなしに呟く。葵は男鹿駅から程ない場所に住んでいるので、そこまでは徒歩で行けるのだ。

「ってことでさ、ソフトクリーム食べたいんだけど……」

「駅をおだてて、何でおごってもらえるとと思った？」

ここで言うのは、男鹿総合観光案内所にあった、おしゃれなカフェのことである。

「って言うか、アオくん自転車もってないの？」

「あー、持ってるけど、ロードバイク借りたほうが良いだろ」

「それはそう」

男鹿駅付近の男鹿自転車舎というところで、ロードバイクを借りる。葵が自転車のスタンドを蹴り起こす。仏頂面を決め込んではいるが、ほんとは楽しいんだろうということがその足どりから伝わってきた。

「ちょっと遠く見れば海があるって、新鮮だね。うちなんか山、山、山、でほんと嫌んなる」

「いや、言うて仙台の方が都会だろ？」

見渡しても、木なんて数えるほどしか見えないのに、蝉の声ばかりが大きい。しゃあ、

と自転車が涼やかに風を切る。寒色で塗りたくられた海なんて嫌いになったところでおかしくないはずなのに、このさわやかさが鮮烈で、どこか特別視してしまう。

程なくして、防波堤が見えてくる。シャシャシャと、海に続く階段を自転車で滑り落ちる二人を止めるものは、ここにはいなかった。

「海ーっ！」

「子供かよ」

「だって海、マジで海、ヤバイ、海！」

笑い声ははじける。海と言ってもまだ砂浜のようなものがあるわけではなくて、どちらかというと川岸のランニングコースのような風体だった。が、水面の向こうに空しか見えないことが、何よりも海であることを証拠づけているような気がした。

「十一、七キロ。大体ゴジラ岩まで一時間弱、おじさんの家で休憩取るとして、疲れるぞ」
「マジか」

海をしばらくサイリングした後は、県道59号を通る。県道59号は別名おが潮風街道とも言われていて、男鹿指定公園の山と海の絶景を駆け抜ける、実に贅沢なコースだ。

「日本海側がカラツとしてるって、マジだったんだね」

ガードレール越しに見える海がキラキラと光る。

「ところで、彩音ってなんであの時盛岡駅にいたんだ？」

「ん、えーとね」

ペダルをつま先で蹴飛ばすどくると回ってやがて元へ戻った。

「宮沢賢治童話村って知ってる？」

「うん、知ってるけど」

「そこに行ったんだけど」

「何でそこチョイスした!？」

「趣味。でそれで、会った女の人に盛岡駅行きなって言われたから、行った」

「お前……変な人に騙されんなよ」

あー、とうなり声をあげる葵を無視して、話を続ける。

「いや、川谷絵里子さんって言ってね。いい人だったよ」

「いや、いい人そうに見えてることが、……川谷？ お前今、川谷絵里子って言った？」

「え？ うん。川谷絵里子さんだよ」

「あー、そっか何で思いつかなかったんだろ。湊君が岩手行くならあそこしかないじゃん」

「は？ 何、どしたん？ 急に」

「川谷美術館、俺が小学生だった時に湊君たちにつれてもらったんだよ。でも、絵里子さんと会ったのは俺だけだったから。多分あれから行ってないなら二人は接点ないと思うけど」

「川谷美術館？ 何それ」

「あー、まったく普通兄弟の自主学習くらい把握して……ないですよねすみません」

緩やかな坂道に終わりが見える。ぶすくれた葵の足をげしげしと蹴ろうとすると、ひよいとよけられる。お返しとばかりに手が伸びてきて軽くデコピンされた。

「で？ 美術館、行くの？ どうするの？」

「これから引き返すの辛くない？ てか坂道辛くない？」

「や、上りはもう終わる」

大きく風が吹いて、坂道を登りきると突然視界が開けた。上へ下へとうねる心地良いワインディングも時には牙をむく。急にひらけた海と空が眩しく焼き付いて。

ガコンと、自転車が傾いた。

「下りいいいいああああ!!」

自転車が風に乗って斜面を転がり落ちていく。その横で、慣れたと言わんばかりにすいすい自転車をこぐ葵。やがて自転車はゆっくり止まって。

「次のとこ曲がったらオジサンの家だから、休憩するよ」

「死ぬかと思った」

「ぜーぜーと肩で息をする私に、葵がいたずらっぽく舌を出して言った。

「仕返し」

心当たり、たたき起こしたこと他エトセトラ。

「……戦争はなくならないね」

「なー」

葵の言う通りそこからオジサンの家までは近く、楽な勾配をゆるゆると進んだ。葵が叔父の家に合いかぎを使って入る。

「爺さん、入るよ！」

「お邪魔しまーす」

出てきたのは眼が落ちくぼんだような、されど厳めしい老人だった。流石にこの人が叔父ではないだろうという思考を読み取ったのか、葵が、叔父さんのおとーさん、一緒に住んでんの、とささやく。

「なんだ、女連れ込んで、彼女か？」

「いやそれはないね」

「即答されると逆に傷つくんだが……」

のどが渴いたと持ってきたお茶に手を伸ばすと、温くなってしまっていた。風が気持ちよかったので忘れていたが、確かに外は三十度を超える猛暑だった気がする。

「おい、ガキ。今出たらちようど夕焼けが見えるぞ」

「ん、ありがと」

勝手に冷蔵庫をあさって、葵がオレンジジュースを注ぐ。すっかり暑さを思い出した体は、冷えたジュースを飲んで、ようやく生き返った心地がした。ゴトン、とコップを机に置き、葵が切り出す。

「美術館のことだけど、たぶん日程通りに回ってたとしたら、出るのは昨日かおとといのはずだから。今から行くような博打を打つよりはここで待ち構えていたほうが良いと思う」
そもそも東北一周してるなんて確証もないわけだけどね、そう零された声に苦笑する。

「彩音はさ、」

「ん？」

「いつまでこんなの続けんの」

「何が？」

「東北全土で鬼ごっことか、馬鹿げてるでしょ」

その声に静かに目を伏せる。それを見て、葵がハートと大きいため息を漏らす。どうやら話は終わったみたいだ。

寒色で塗りたくられた海なんて好きになるはずなかった。

「アオくんさあ、最近学校どう？」

「ん、まあまあ、うまくやってるよ」

それでも、優しい人たちは、真に強い人たちは、みんな海の色をしていた。それはきつと、海になるほど深い悲しみの中で息をしているから。

「彩音は？」

葵も、お兄ちゃんも、みんな悲しみに折り合いをつけて、生きている。暗い過去の中で、私だけが取り残されている。

「んー？ 私はね、今学校行ってないよ」

キャンバスを広げる。空が真っ赤に燃える。筆を持った手をピンと伸ばす。空をまっすぐに見る。

夕焼けを描く。

油絵。油絵は水彩画とは違い顔料となる絵の具を油で溶く。そのため固まりが遅く、扱いが難しい。が、その分表現が自由になる。例えば、ペintingナイフで乾ききっていない絵の具を削ったり、盛ったりだとか。オイルにも用途に合った種類がある。

燃えるような夕焼けを描く。

取りつかれたようにスマホに手を伸ばす。シャッターを切る。

暗い色から塗り重ねる。上から、青、黄色、灰、オレンジ、赤、オレンジ、青。パレットに絵の具を出す。

雲がちかちか、黄金色に光る。赤。雲に暗く、影が落ちている。朱。波の音、ざわざわ。青く光って。赫。空と海の境目が金色に輝く。紅。

空の色は。上から順番に青、黄色、灰、オレンジ、赤、オレンジ、青。

青があつて、黄色がある。空と雲の境目は？ オレンジは？ 赤ってどこにあるのかな。

「自由に、楽しく描いていいんだよ」

なあ、おしえてよ。おしえろよ。

おれがいまみているものはなに？

ガツと足が引っかかって、イーゼルが倒れる。大きな音を立てて、地面にいろんなものがバラまかれた。呼吸が浅くなる。ぽつぽつと雨が降ってくる。狐の嫁入り、天気雨って言うんだっけ。ごろん、と芝生の上に身を投げ出す。頭がぼーっとする。パレットに出したままの絵の具が、混ざりあつて溶けていく。

天気雨のことを、天泣というらしい。尚も黄金色に光る空を見つめて、思った。

天が、泣いている。だれかのかわりに泣いている。

びしょぬれになって。止む気配もない雨にパラパラと打たれている。ゆっくりと目を閉じる。このまま、洗い流してくれ。

しばらくして、顔に水滴が当たらなくなったような気がして、おそろおそろ目を開ける。

視界いっぱい広がったカラフルな虹。はたと我に返って、よくよく見てみると、子供用の傘だと気づく。そうだ。体いっぱいには雨粒は当たっている。

視線を彷徨わせて、幼稚園児くらいだろうか、幼い子供と目が合った。子供にぐいっと顔をのぞき込まれる。

「いきてる」

がばり、と体を起こすと、子供の体がビクンと震えた。驚かせたかと思ったがすぐに柔らかな笑みを浮かべる。

「えっと、お父さんかお母さんは？」

子供がフルフルと首を横に振る。

「迷子かな？」

今度は、こてんと首を傾げた。知らず知らずのうちにはぐれてしまったパターンか？

「お名前は？」

「けいこ」

『本日も、青森県観光物産館アスパムをご利用いただきまして、誠にありがとうございます。ご来館中のお客様に迷子のご案内をいたします。赤色の服を着た、清水啓吾くんのお母さま、お父さま。啓吾くんが一階、ラウンジにありますので、至急お越しくください』

「はい、もう大丈夫です。ありがとうございます」

「あ、はい。でも心配なので、俺もう少しいますよ」

「そうですか。本当、ありがとうございます」

話を聞いていると、あそこのおつきいびる（アスパム）で買い物をしていたらしい。何がどうなって公園まで来れたんだ？

「かっこいいね、仮面ライダー？」

啓吾のポーチを指して言う。

「でしょ！ かっこいいんだよ。かめんらいたー！」

放置はされないだろうが、迷子の子供一人を残して帰らないという位の良識はある。だが、高校生が子供の扱い方なんて知ってる訳もなく、また沈黙が続いてしまう。

「ねえ、お絵描きする？」

そういつてリュックからスケッチブックを取り出す。さらさらと鉛筆を走らせて。

「かめんらいたあ？」

座っていた椅子から体を伸ばして、啓吾がぐいっと絵をのぞき込む。近いところでもじ

まじと見つめて、ぱあっと顔をほころばせた。

「そう、こんな感じであってるかな？」

「すごい！ けいごもかく！」

「啓吾君はさ、お絵描き好き？」

「大好き！」

鉛筆と、スケッチブックを一枚破って渡すと、嬉しそうに絵を描き始めた。そういえば、子供が悪く言えば下手な絵を描くのは、鉛筆の長さや太さと、手の大きさがあってないからだそう。言い換えれば、その絵はいくら模倣しても、その時期にしか書けないということ。

「上手だね」

子供の創造力というものは恐ろしく、恐るべきスピードで画用紙が埋まっていく。

「かめんらいだーは、すごくつよいし、こまっている人をたすけてくれるんだよ」

「そっか」

「おれも、あんなふうになれるかな」

十五分ほどたって、母親が姿を見せた。

「すみません。ほんとにありがとうございます」

「あ、いえ、全然大丈夫です」

「でも、本当お若いのに。迷惑かけてしまった」

「とかむしる僕の方が迷惑かけたような……」

平謝りしてくる母親をなだめるのにも一苦労だ。しこたま礼を言った後に、踵を返した親子たちを、目を見開いて引き留める。

「ちよ、あの、すみません。五分だけ、五分だけ、下さい」

「はい？」

立ったまま腰を折って、スケッチブックと向き合う。鉛筆画。モノクロだからこそ、その濃淡で色合いすらも表現できる。

絵本から飛び出してきたようなデフォルメの親子が二人、手をつないで歩いている。虹色の傘をもって、天気雨の中を。

「絵、お上手なんですネ」

「まあ、そういうわけでは……でも、鉛筆画はいつもボロクソ言ってきた人にも、褒められたんで、自信あるんです」

絵をのぞき込む母親の仕草が、啓吾とよく似ていて、思わず笑みが零れる。

「啓吾くんも、絵を描くのが好きなんだそうで」

「そう」

母親がなんだか安心したような声で言う。

「うちの子、弱視だから、それ聞いて安心しました。絵を描くのか、そういうのが苦手
に思っちゃったらどうしようって」

「関係ないですよ」

子を想う優しい声に軽く目を細める。

「楽しいって思えれば、十分なんです。啓吾くんは、そう思ってるんで、大丈夫です」

啓吾に目線を合わせて、しゃがみ込む。スケッチブックに書かれた親子を指差して「これが、啓吾くん、これがお母さん」そう言うと、ぱあつと弾けるような笑顔を見せた。

「啓吾くんが、傘をさしてくれた時すごくかっこよかったよ」

「かめんらいだーみたい？」

「うん、仮面ライダーみたいだった」

天が泣いていると思った。記憶の底で、少年が笑った。

夜が更けてあたりは濡れそぼった鴉みたいな色をしている。青い海公園の時点で夕暮れ時だったのだから決しておかしくはないのだ。もしもあのまま啓吾が迷子になっていたら考えるとゾツとする。

何日かぶりに携帯の電源を入れる。美術館から依頼が入ったのが初日。ああ、そのあと明美と連絡先を聞いたつけ。およそ三日ぶりにもなるのか。天然デジタルデトックスだ。

「通知ヤバ、陰キャかよ」

真っ先に目立つのは家族からの着信。三日で四十件ちよい……これは、放任気味なんじゃないか？ というか両親より妹の方が着信が多いのはどうなんだ？

次に気が付いたのは、明美からのメールだ。

——学校帰って、柏木君の絵を見せながら殴り込みかけに行ったら、鳴子峡、修学旅

行の行き先に決定しました！ 五年生だそう。担当学年で良かったあ。なるこ食堂はまだまだ続いていきそうです。ありがとね！

明美さん、今まで、コンクールに出すとか、純粹にうまくなるためだとか、そんなことでしか絵描いたことなかったんですけど。別にお絵描きが楽しくなったわけでもないけど。俺の絵見て喜んでくれる人がいるって知って、俺の絵で、人生が変わる瞬間にここ数日立ちあつて、その人たちの笑顔を想像することは、たぶん楽しいって、思ってます。

なんて、流石にメールにして送るのはこそばゆいからやめておく。そのこそばゆさを振り切るようにして、青森駅のガードレールによりかかって、空を見上げる。雨が少しの間でも降っていたのが嘘みたい綺麗な月だ。暫くして遠くでぼんやりとした声が聞こえる。

「もしもーし、おーい、君、君だよ」

「え？」

声の方向に目を向けてみると、若い警官が立っていた。

「駄目だろ、こんなところに寄りかかってたら、危ないよ」

「あ、はい」

「君、待ち合わせかなんか？ もう高校生くらいだろうからきつくは言えないけど、これくらいの時間帯だって十分に危ないんだから。ほら、用がないなら帰った帰った」

「いや、でも」

「ていうか、君。すごい荷物だね。まさか一人で来たとかじゃないよね」

「えっと」

「家出とかだったら、俺、注意しないとイケないじゃん」

警官の雰囲気におおされてしどろもどろになる。流石にまだ補導されるような時間ではないはずだ。あれ、でも家出って補導されるんだっけ。思考の沼と、補導の毒牙にかけられそうになった時、スツと通る声があたりに響いた。

「すみません、そいつ、俺の連れです」

「は？」

「よお、坊主。久しぶり、元気にしてたか？」

「あ、えっと、保護者の方で？」

「そうです！ 保護者デス！」

目線の先にはお洒落なスーツをかつちりと着こなした胡散臭い男性がいた。

「ちょっと待ち合わせしてたんで、すみません、ご迷惑おかけして」

「ならいいんだけど、大丈夫ね？ 君も」

人のよさそうな笑みがまた胡散臭さを助長させている。かといって今ここで同調しないと、ここから切り抜ける策も思いつかなかったのだから、とりあえず頷いておく。

警官が遠ざかって、ほんのり浮かべていた笑みを取っ払う。

「で、あんた、誰ですか？ 自称・ホゴシャサン」

「これ、落としてた」

男が差し出したのは柏木湊、とぼっちり記載されている生徒証だった。

「まさかって思ったけど、いや、ほんとに君だった」

「はあ？ 何の話ですか。胡散臭い」

君、マジで本音隠しもしないね、と男が爆笑するので、ムツとして男の手から生徒証を奪い取り立ち去る。が、背中に投げられた言葉に、思わず立ち止まった。

「君は俺を知らないかもしれないけど、俺は君を知ってる」

◆ 四日目 秋田県 ゴジラ岩

「んー？ 私はね、今学校行ってないよ」

その言葉にそっか、と葵は軽く呟いた。しばらくの沈黙が流れる。そろそろ行く、葵の言葉に従って、自転車のスタンドを起こした。当然のように前に行く自転車を、そこそこ距離を開けて追いかける。何でもなしのことのように扱うのが、葵なりの優しさなんだと気づいて、さらに置いて行かれていくような気持ちにさせた。

ゴジラ岩までの距離は今まで走ったものよりも随分短くて、体感では二十分、実際には十五分と行ったところだろうか。シャシャシャ、と自転車をこいでいる間だけは心地良い沈黙が保たれているような気がして、遠くに見える防波堤を知らない振りした。

やがてごつごつとした岩場が見えてきて、その前にある芝生に葵が自転車を止める。葵に倣って、ガチャンとスタンドを蹴り落とし、鍵をかけた。

夕焼けが見えるという予報は見事外れているようで、燦々と照り付ける太陽に、首元から汗がしたたり落ちた。汗をタオルでぬぐい去る。その沈黙の中で、先に口を開いたのは葵だった。

「たまにさ、病気とか、障害とかを、個性って言う人がいるけど、俺はそうは思わない！」

話の内容とは裏腹に、眩いばかりの笑顔だった。

「よーするに、障害にも軽度から重度まであって。個性って割り切れる人は、それでいい

と思うけど、そうじゃない人に押し付けるのは違うよねって話」

眩しい笑顔で、ひねり出された明るい声に、なぜだか泣きたくなる。

「少なくとも俺は、そんなふうに割り切れなかった」

吃音とは、言葉が円滑に話せない、スムーズに言葉が出てこないこと。「発語時に言葉が連続して発せられる（連発）」、「瞬間あるいは一時的に無音状態が続く（難発）」「語頭を伸ばして発音してしまう（延発）」などの症状を示す。

幼馴染だった。だからこそ触れなかった。彼も昔馴染みゆえか私の前ではめつたにどもつたりしなかったし、励ましはすれど、特段触れるべきことも思わなかった。

「そう言ってもらった方が、嬉しい人もいるし、本当に個性っていうくらいの軽微な人もいる。そういう人にはそう言ってあげてほしい。でも、個性ってのは、少なくともプラスの方向へ解釈されるものなんだろう？ 小さい頃からうまく話せなくて、その時から個性云々って言われるのには抵抗があったけど。障害だってレットテルはられてからは、もっと言えなくなった。障害って言葉をいい意味で使う人なんて、見たことないよな」

「……」

「前からおかしいって思ってたから、診断された時は安心したよ。これから、ネタにされることもないって」

でもさあ、葵が眉を下げた笑う。

「本当に惨めなのは、特別扱いされることなんだなあ」

知っている、葵がまだクラスを中心にいた時。葵が少し嘔むだけで、クラスの空気がはれ物に触れるようなものにすり替わる。暗い雰囲気を払拭しようと明るく振るまう男子たちに、葵は眉を下げて困ったように笑ってた。多分、今まで悪気なくネタにしていたことが気まずくて、余計こうなったのだろうと思う。

「みんな、いいやつだったんだよ」

いい子たちだった。だから、悪気がないから、責められない。悪くない人はきつと責められない。だから自分が悪いのだと、おかしいのだと、考える。容疑者を決めつけることで楽になろうとする。だれも悪くない、が一番やるせないのだ。

「吃音のことで、馬鹿にされるのは嫌で。でも特別扱いされるのも嫌なんだ。普通に接してほしいし、吃音だからって言うのも言い訳してるみたいでいやだ。なんか欲張りで笑っちゃうよな」

それでも、それらはすべて両立しうる感情だ。

——覚えていて。何かが決定的にずれていった瞬間。いつものように葵はクラスの中心の子たちとつるんでいた。その子たちの一人が、ふと言った。たまたまそういう話になってたのかもしれない、前後の話までは聞いていなかったのだからないが。丁度、小学生のメンタリテイでは気を遣うのも億劫になってきた頃合いだったろうか。

「吃音症？　だっけ？　障害とか、そんなの言われたって全然気づかねえくらい大したことないじゃん。気にすることでもねーよ」

特別扱いもされてないし、馬鹿にされているわけじゃない。むしろ、ある意味では理想的な対応だったのかもしれない。

「な、どちらかといえば？　個性ってやつ？」

でも、あんたらに言われることじゃないんだよな。

一番近くで見えてきた、どれだけ葵が悔しい思いをしてきたか。些細なことで笑われるたびに、泣きながら練習してたんだ。

あの時、葵は何でもないことのように笑って流していた。だが、にじみ出るように深い海の色がとぐろを巻いてあふれ出す。感情の奔流に吞まれる。その時やっと、理解した。これは絶望の色だ。何よりも色濃い絶望の色が、渦を巻いて葵を飲み込んでいくのを、私だけが見ていた。見ている、だけだった。

「中学で秋田に引越したのは、ほんとに家の事情。で、まっさらな人間関係の上でもう一度やっていくために、先生にも友達にも、このことは言っていないんだ」

「……マジかあ」

「そ。で、結構うまくやってるよ」

そもそも、小学生の時から、すでに治りかけだったらしいんだけどね。葵は穏やかな表情で告げる。

「よく考えて言う。いいたいことを頭でしっかり考えて、それから発言する。人が全員カボチャとか、そういうのと大方同じで、俯瞰した視点で物事を見る。おかげさまで、ちょっと無口だけど頼りになるクールなイケメンポジやっています！」

「すごいキャラ変だね」

リズムカルなツッコミに葵がフツと笑いをこぼす。ついで、沈黙が落ちた。

「……自分の力で頑張って、死ぬほど努力して、それを認められて。初めて吃音を個性と

言えるようになった。胸を張って言えるようになった。みんなからしたら、俺はやっとスタート地点に立てただけなのかもしれないね。でも俺は、やっと今の自分を誇りに思える」

あれから、いじめられてるわけじゃない。シカトされてるわけでもない。むしろ中学でも持ち前のコミュ力を生かして、うまくやってきた方だと思う。それでも、

「え、なにあれ、先生、やば。キモ」

青が零れる。

「田口って、マジうざくない？」

青が溢れる。

青、蒼、ちょっと恋バナして、碧、青、蒼、テストの話、青、藍、蒼。そして黒になる。この人たちとはちょっと違うんだなって、気づいた瞬間。私は年不相応にピンクであふれかえった部屋で、みっともなく枕に顔をうずめていた。

孤独だった。家族にもこの力のことは話したことはなかったし、兄に言うなんて以ての外だ。暖色で満たされた部屋で、黒々とした青に足を取られて、ずぶずぶと沈んでいく。

でも、本当は、気づいているんだ。本当に優しい人は、強い人は、いつも海の色をしている。絶望を知っているから、優しくなれるんだ。絵里子さんも、葵も、お兄ちゃんも、そうだ。

皆それぞれ折り合いをつけて、立派に人生を歩んでいる。私だけが、取り残されている。

葵は気付いている。幼馴染の長年培ってきた勘だろうか、少なくとも私が不登校になった理由の一端を担っていることには気付いている。そうでもない、わざわざ私に今更こんな話をしてくれた訳が説明できない。

本当は、置いていったことに、取り残されたことに、憤って詰ってやりたいと思う。でも葵が悪いことなんてないのだ。悪くないから責められない。それが一番やるせない。

寒色に溢れた世界が嫌いだ。悲しみがないと世界は成り立たないということを証明しているようだから。自分のせいで誰かが傷つくのが怖い。悲しみを生まないように、ささやかな幸せを与えられるように、自分なりに色々やってみたりした。でも結局は、嫌われて、傷つきたくないから、一緒に誰かの悪口に同調して、それで悪意がどんどん膨れ上がる。次第には家族に愚痴をこぼすことすら怖くなってくる。

いつそのこと、色が分からなくなればいい。そう思うときもある。

誰かの世界を、お兄ちゃんの世界を、彩れるようにと名付けられた。名前負けもいいところだ。

本当に、本当に嫌いなのは、分かっただけ無尽蔵に悪意を生み出す自分自身だ。

バシヤンと、顔に水がかかる。いつの間にか葵はスニーカーを脱いで、膝までズボンをたくし上げて、海の中に立っている。

「来いよ」

好戦的な視線を投げかけられて黙っていられるタチでもないで……。

「くらえっ！」

スニーカーを脱ぎ捨ててバシヤリと海をたたき。跳ね上がった水しぶきに光が反射して、ザッと葵に降り注いだ。岩場の出っ張りが足裏に細かな傷をつける。こうなるともう乱戦だ。海に浸かった服の裾から水がじわじわ染みていく。水をかけあっているのだからそれ以外の部分ももう手に負えないほどびしょぬれだ。舞う海水が目の中に入って、生理的な涙が出る。

中途半端な慰めはいらない。

二人、泣き叫ぶようにして笑う。獣のように吠える。

容疑者にすらなれない、出来損ないの被害者もどき。無意識の悪意にまみれて、いつの間にか、泣くことすらできなくなっていた。

太陽が沈む。地平線の向こうから、じりじりと空が燃える。絵の具が溶け出すように真っ赤に染められていく。沈みかけの夕日に照らされて、葵の肘を掴んで、ドサリ。海の中に尻もちをつく。

葵が海水が滴る前髪をかき上げる。てかてかと夕日が反射して、葵は穏やかに笑った。

「アオくんさあ、」

「ん？」

「いい顔するようになったね」

光に包まれている。青色の海の中に、金色の絵の具が流れ出るようだ。空と海の境目が分からなくなる位の光に、包まれている。今の葵はそんな色をしている。

「私、学校行こうかな」

◆ 五日目 秋田県 ゴジラ岩

「ただいま、親父」

「おう、拾いもんか？ その坊主」

宍倉徹。俺の友達の親戚だと名乗る怪しさ百%の男。何故だかドアをがらりと開けて手を振るだけで胡散臭いという、持ち前の特技を発揮してた。すごい。

坊主、何て年でもないんだけどな、と空を仰ぐ。何で俺ついてきちゃったんだろ。

「今日は変なことが多いな。あのチビも女連れ込みやがった」

「へー、いいねえ、お年頃だねえ」

ここまでついてきたのは、他でもない、かの有名な画家の宍倉修がいると聞いたからだ。宍倉修は日本では全くの無名だったが、ニューヨークで名を挙げた評判の画家。最初は徹の話なんて信じてはいなかったが、宍倉姓の免許証や修先生とのツーショなんかを見せられてしまえば信じるしかない。信じてしまえば行くしかない。

「なんか泊まるどころ探してんだって。俺が面倒見ようかと思ったけど悪いが明日から東京行かなくちゃいけねえんだ。泊めてやってよ」

「おう、いいべ。それにしても坊主、お前こんな胡散臭い男にひよいひよい着いてくるもんじゃねえよ」

おっしやる通り！

「じゃあ俺、明日の朝には東京だから、もう出るわ」

「よーし分かった。しばらく帰ってくんない」

「オイ」

入り口付近に置かれているキャリアケースと数枚の書類を掴んで、徹が出ていく。いや、マジで何だったんだあの入。

「いつまで突っ立ってんだ坊主」

コレ、大丈夫だよな。部屋入った瞬間爆発とかしないよな。芸術家ってなんとなくそんなイメージがある。恐る恐る部屋に足を踏み入れた。

「えっと、宍倉先生ですよ。画家の」

「お、坊主お前俺んこと知ってるか。お前見込みあるなあ」

「あ、でも有名だし」

「そーだよ有名な宍倉修だべ！ ニューヨークで一発当てて、日本帰ってきたらちやほやされると思ってたのに。家族も親戚も妙に恥ずかしがって誰にも言いふらしゃねえ。つまんねえ人生だ」

「あー、なるほど」

一軒家のこじんまりとした造りの家は、道すがらで見た民家よりもやや狭い。様々なものが散乱しているが、それでもあるべきところに収まっているという感じがして不思議と散らかっている印象はない。開け放たれた縁側から、青々と葉をつけるミカンの木が植えられていた。

「えっと、あの、柏木湊と言います。サインください」

「湊か。おうよ、何処に書く」

「じゃあこれに」

そう言ってリュックを差し出す。絵の具でまみれたリュックを見て、修はフツと鼻を鳴らす。

「あれ、ミカンの木ですか？」

庭のミカンの木を指差して言う。

「おう、よくわかったな。俺でもほとんどわかんねえよ」

「あー、夜目が効くんです」

ジーっと図るように見つめる視線に若干の居心地悪さを感じて目を逸らす。

「坊主絵描くだろ？」

「まあ、はい」

「そうかそうか」

すっかり気をよくした修が大口を開けて笑う。

「あー、荒崎海岸ってところにな。絵描くにはびったしの場所があんだよ。そこに家持っててよく絵描いてんだ。行ってみるべ？」

「……はい！」

朝焼けが光る。キャンバスと向き合う。手が震える。震える声で、青年は言った。

「俺、色が分からないんです」

◆ 六日目 山形県 荒崎海岸

昨日夜遅くに車で山形まで移動して、朝一番で朝焼けを描くと告げられ連れてこられた家は、秋田の家よりも幾らか広く、豪華ではないが庭も幾分か華やかだ。絵を描く修のために、季節折々の花が楽しめるように設計されていると聞く。

まだ暗い朝に家を出て、海岸へと向かう。手前に海岸、後ろにイトスギの群生林があった。いつものリュックを握りしめる手が微かに震える。芝生のキャンプ場らしきところにキャンバスをセットして、憧れの先生と並び立って絵を描く。嬉しいはずの状況なのに、

なぜだか心がざわついた。足元にぼっかり穴が開いたみたい感じがする。

「湊、どうした」

例えば、電車で寝てしまった時みたいに。自分の世界に沈みかけていた意識を、呼ばれた名前に反射で引き戻された。

地平線の所から空が黄金色に変化していく。迷わず修が赤色の絵の具を取るのを見て、心が揺れた。言葉が勝手に口をついて出てくる。

「俺、色が分からないんです」

俺にとって、絵を描くこととはコンプレックスに向き合うこと。

「……そうか、あー、夜目が効くのもアレか？」

「まあ、はい。……かなり重度の色弱で、D型っていうのかな？ 緑色がどうこうっていう、あのー、二型二色覚ってやつです」

わしゃわしゃと頭をかきむしることで、手の震えをごまかす。

「世界がセピア色みたいで。赤と緑と茶色の区別がほとんどつきません。オレンジなんかは黄色に見えるし。あ、ピンクは灰色に見える。マジでクリスマスとか勘弁って感じです」

「そうか」

目を閉じて、自嘲気な笑みを浮かべる。

「夜目が効くとか、悪いことばかりじゃないんですけどね」

「あー、あれだ。なんか最近そういう眼鏡みたいなのあるだろ、色弱の」

「小学生の時に、一瞬かけてた時もあるんですけど、結局やめちゃいました」

——覚えてる。

「初めて見た赤とか、緑とか。そりゃあもう感動したけれど。何だろう、ちょっと違うんですよね。視界がピンクがかってて。もやもやした中に強い色がぼつぼつとあるって感じです」

覚えている。学校にサングラスのような眼鏡をかけて登校した時。事前に眼鏡のことは伝えていたとしても、時々襲う、気遣うような視線。他クラスの人の無事のうわさ話。何よりも、ここまでしてもみんなと同じ世界を見ることができないという事実がたまたまなく惨めだった。

「みんな優しい人なんで、先生に言ったら赤いチョークは使わないでくれるし。美術の時間も困ってたら助けてくれる友達もいる」

赤いチョークは緑色の黒板と同化して文字が見えないことがあるのだ。

天と地がひっくり返っても、みんなと同じ世界を見ることはできない。その事実は幼い

心に大きな衝撃を与えた。それからだった、絵を描き始めたのは。無駄にセンスだけはあ
るから、線画とか鉛筆画とか、技術だけは無駄にうまくなって、それが余計に俺を惨めに
させる。色の濃淡だけで大体の色が見分けられるようになったころには、天才だと吹聴さ
れるようになった。

「最近、色弱の人のために、色名を覚えてくれるようなアプリもあるんです。で、絵の
具のラベルの番号と、色と、写真見比べて、必死こいて覚えました。後は細かい濃淡見て
描いてます」

あ、でも飯はちょっと食欲無くなるような色してて。あれ困るんですね。眉を下げて
言った。修にアプリを見せながら、青い海公園でとった夕日の写真をこっそり削除する。

「この生活に満足してるのに、何で絵とか描いちゃうかなあ」

嘲るように言った。

——特別扱いされるのが、一番惨めだ。

証明しなかった。同じ世界を見ている。同じ世界に生きている。

「坊主、お前この世界が綺麗だと思うか？」

「……えっと……最近まで、知らなかったんですけど。……今はちょっとそう思えるよう
になつてきました」

誰よりも無辜の悪意にさらされて生きてきた。だから、陰口が称賛に変わるまで、自分
をたたき上げた。そこに、楽しさなど必要なかった。

綺麗なものを見るのは楽しい。俺の絵を見て誰かが浮かべる笑顔を、綺麗だと思う。

「その年で気づけるってんなら、上出来だよ」

温かい微笑みに、フハツと笑みが零れる。

「最近ようやく、絵を描くのが楽しいって思えるようになったんです」

あるいは、もうずっと昔から。

太陽はもう上り切っていて、ふと見上げた空は、青く澄んでいる。

「夕方、もう一回描きに行くぞ」

夕闇に紛れて、もう一度、キャンバスを開く。

パレットを手に取る。絵の具を出そうと、赤色に手を伸ばして、やめた。

「お前、今何が見えてるよ」

「えっと、夕焼けです」

「御託はいいよ。何が見えてるか」

「……俺が見ている空は」

今、目の前にある景色は、

「空は、何処までも青いです。ターコイズブルーって言うのかな。そんな色です。太陽が出ているところは黄金色に光ってる。夕焼けと青空の境目は、クリーム色です。海は、空みたいに青いんですけど、波立っていて。太陽が反射しているところは白んでいて岩の上に雪が積もっているみたいだ」

「そうか、そりゃあいい。……綺麗じゃねえか」

満足そうに修が頭をなでる。「ずっと分からなかった」と、その手付きに本音が漏れる。

「ゴッホやターナーだって一説によると色弱だったそうです。男性の二十人に一人が色弱だそう。A B型の人が十人に一人だっていうのとそこまで変わらないはずなのに。それなのに、どうして異常って言われたいいけないんだろう」

「リアルを求めるってのもまた一つの道だ。それでもってピカソみてえな絵もまた一つの芸術だ。絵の上手い下手は素人にはそうわからんもんだが、絵を楽しんで描いてるかって言うのはすぐみりゃ分かる。自由に描いた絵は見るだけで楽しいもんだべや」

昔、ある雑誌のインタビューを母が読み上げてくれたことがあった。真っ直ぐに自由を語るその言葉を母がなぞる。その言葉が幼い心にすんと落ちた。

「今、俺が見ている世界がみんなと同じものだったことは、誰一人証明できねえ」

修が静かに微笑む。インタビューの人はこんな気持ちになったのだろうか。そっくりの言葉を受けて思う。満たされていくような、そんな感覚だ。

「誰が何と言おうと、お前が見ている世界が、お前にとっての正解だ」

獣のような衝動だった。筆を手取る。絵を描くことに、楽しさはいらない。でも知らず知らずのうちに楽しんでいる自分がいる。

描きたい、描きたい。絵を構成するのは、色だけじゃない。周囲の音、匂い。そういうもの全部含めて、その絵を形作っている。スクリーン一枚通してみていた世界が、急に自分のものとなる。

波の音、ざわざわ、黄金色、ちかちか。太陽がまぶしくって、潮の匂いはさわやかに。今すぐ天使が下りてきたって驚かないような、そんな世界に生きていた。

自分の世界に生きていた。

「よお、ガキンチョ」

「あ、徹」

入道崎の夕焼けを見に行っても、やはりというかお兄ちゃんはいなかった。

「その子が噂の彼女ちゃん？」

「ちげえよ。オッサンは知ってんだろ」

「はは、初めましてだね。彩音ちゃんでしょ、聞いてるよ」

「あ、初めまして葵君の叔父さんですよ」

「そう、葵の叔父の宍倉徹です。間違ってもカタカナの方で変換しないでね。オジサンって」

胡散臭い。ハハと、調子のよい笑みを浮かべる徹を、葵がギツと睨みつける。

「てかオッサン何でここにいんだよ」

「いや、君のおかーさんに聞いたらここにいてるって言ってたから」

「は？」

「ごめんねー、二人だけの時間邪魔しちゃって」

「は？」

ケラケラ笑う徹の足を葵がげしげしと蹴とばす。

「君の話は葵から、よく聞いてるんだ」

「おいオッサンもう黙れ」

「おにーさんいるでしょ」

いったん徹がここで言葉を切る。

「お兄さんと、昨日俺会ったよ」

「はあああああ!?!」

「仕事で親父のところに預けてたけど、今見たらいなかったから、きっと荒崎の家だろうね」

「ちよ、お前、お前はなんでんな大切なことを先に言わねえんだよ!!」

葵の蹴りの速度が速まる。なんてことのないような顔をしているが、あれは痛い。

「えー、だって妹ちゃんまでいるなんて思わないじゃん」

ピロンとスマホがメールの着信を告げる。それを見て、目を見開く。鞆の中に眠るドット柄が印字されている箱を想う。

「で、行くの？ 行かないの？」

葵の方を見ると、コクリと頷いた。それを見て、叫ぶように言った。

「行きます！」

やらなきゃいけないこと。お兄ちゃんに世界を見せること。

◆ 七日目 山形県 荒崎海岸

夜明け前の空を眺める。雲がスーツとはけていく。色弱の特徴として、夜目が効くので、おそらく普通の人ならばんやりとしか見えないであろう夜中の雲の峰が鮮明に見える。

「自由に描いていいって、こういうことなんだな」

あの絵は、宍倉修の絵描き仲間展示会に、出展させてもらえるらしい。孫を見るような優しい目で、今しがた告げられた。認められたと、思っているのだろうか。自分の腕前を、自分の世界を。だんだん地平線が白んで、空に金色が溶ける。

「お兄ちゃん！」

その声に、後ろを振り返る。途端、頬に衝撃が走って。

「彩音？」

「東北全域鬼ごっことか、ほんとふざけてる！」

彩音がふにやりと眉を下げる。

「心配したんだよ」

「お兄ちゃん、メール見た？」

「何、それ？」

彩音がスマホを目の前にかざす。そこに書かれていた内容に目を見張る。

「学校がこっそりコンクールにお兄ちゃんの前の絵出してたんだって。で、それが金賞。今までの実績から加味しても、十分だってことで推薦決まったってよ」

「マジかよ……」

「一人の審査員さんが猛プッシュしてくれたらしいの。何でもお兄ちゃんの絵のファン一号さんなんだって。電話で教えてくれた。もちろんズルとかはしてないらしいんだけど」

美大には、十八歳以上の絵の上手い人の中でもほんの一握りしか受からない。今までの実績からしたら、湊は十分だ。だが、高三での受賞経歴がゼロというのは正直厳しい。筆の遅い自分が、コンクールでいい成績を残す、美大に受かる、そのレベルの作品を両立して作れるとも思えなかった。一般受験に切り替える時の最後のチャンス。ここまでで推薦を決める、それが親との約束だった。

「それと、私学校行くことにしたよ。それで、あともう一つ！」

彩音が柔らかな笑みを浮かべる。残念ながら、ケーキは駄目になっちゃったんですケドねー、無邪気に言った。

「お誕生日おめでとう。これ、かけてみてよ」

ドット柄が印刷された箱から、彩音がサングラスのようなものを出す。

「何？」

「いいから」

言われたとおりに眼鏡をかける。

瞬間、目を見張って、バツと後ろを振り向いた。

「色弱の眼鏡、お小遣いはたいて買っちゃった。えーと、EnChroma Glasses っつ言うらしいよ。外では使えるけど、家の中では使えない。使えば使うほど目が慣れ「赤だ」

「え？」

「……上から順番に、青、黄色、灰、オレンジ、赤、オレンジ、青」

「うん、」

「やば、泣きそう」

呻くように唇が震える。綺麗だなあ、本当綺麗だ。何よりも鮮烈な色彩の濁流に溺れて、殺しきれなかった嗚咽が口の隙間をついて出てくる。

「赤も緑も、全然違う。ちゃんと黄色はオレンジだ。青が赤っぽく混じってんのは」

「紫だよ」

「うん、紫」

泣き笑いのような、不格好な笑みを浮かべる。

ZYPRESSEN いやいよ黒く 雲の火ばなは降りそそぐ

悼むような緑色に沈むイトスギの群生林にオレンジ色の光が差し込んで、色が弾ける。

きっとこの世界さえも、彩音たちが見てるものとは微妙に違うのだろうけど。きっと誰一人、同じ世界を見ている人はいなくて。

「絵描くのが楽しくなって、この世界を綺麗と思えるようになって」

「うん」

「みんなの見ている世界も、全部知ったうえで。俺は、きっと自分の世界を愛せると思う」

そうだ、セピア色が輝く世界に生きていく。